

生活史研究への示唆を求めて：ミクロの歴史学の場合

著者	水野 節夫
出版者	法政大学社会学部学会
雑誌名	社会志林
巻	57
号	4
ページ	77-118
発行年	2011-03
URL	http://hdl.handle.net/10114/6623

生活史研究への示唆を求めて

——ミクロの歴史学の場合——

水 野 節 夫

1. はじめに：
2. ミクロの歴史学（microhistory）の諸特徴について：
 - 2.1. G. Iggers〔1997〕の場合：
 - 2.2. ‘ミクロの歴史学’の実践者たちを中心にした展望論文情報の場合：
3. ‘ミクロの歴史学’的営みの注目点は何か：
 - 3.1. （二重の意味での）ミクロ的实践の遂行：
 - 3.2. 着目点としての＜変則的なものや裂け目・隙間・矛盾点等＞とその含意：
 - 3.3. ミクロの歴史学における分析の二正面作戦：
 - 3.4. ＜‘個人’‘個性的なもの’‘人間的なもの’‘生活体験’への眼差し＞：
 - 3.5. ＜個別例の位置，意義をどう考えるべきか＞：
 - 3.6. ＜ミクロからマクロへ＞と繋げる2系列の議論：
 - 3.6.1. ＜‘痕跡＝糸口’からの探索＞という方向での議論とその特徴：
 - 3.6.2. 証拠の蓄積と多元的コンテクストづけを通しての議論とその特徴：
 - 3.6.3. ＜症状から疾患への繋げ方＞についての仮説的見解：
4. 生活史研究とミクロの歴史学との位置関係について：
5. 終わりに：ミクロの歴史学からの示唆；

1. はじめに：

生活史研究の課題としては、どんなことが考えられるだろうか¹。この課題を考えるということの中身は、より細かく、【生活史研究でできること；やってきたこと；期待されていること；やりたいこと；やるべきこと；やってもいいこと；やれるかもしれないこと】²といった具合に分節化することができるだろう³。そうした中で、個人研究の一環として生活史研究にコミットしているぼくとしては、＜ぼく個人としては生活史研究でどういったことができそうか＞という点について、とりわけ＜生活史研究という言い方でどういうことをやりたいのか＞という点について振り返り思索を深めていくことに関心を持っている。

そうした思索を深めていく際のヒントの見つけ方との関連でぼくが注目しているのは、次の3点

である。

第1は、‘面白さ’の‘フィルター＝ふるい’の活用である。これは、どういう点に目配りすれば、あるいはどういう具合にすれば、‘これは面白い！’と思えるような生活史研究を生み出してこれるだろうか、という発想を大切にすることである。

第2は、生活史研究の分野での‘先行実績・業績’の洗い出しと評価である。本稿では、この作業を正面から主題的に取りあげるとことはしないが、第1点として挙げたく‘面白さ’の‘フィルター’>を介して、これまでこの分野で生み出されてきた研究成果を精査・検討する作業自体は、大変重要なことと考えているということだけは触れておきたい⁴。

第3は、**近接する研究分野の諸業績の批判的検討と組み込み＝吸収**である。＜生活史研究でどういったことができそうか＞を考えるためには、異分野での研究成果などについて検討を加えてみることは参考になるはずである⁵。というのも、とりわけ異分野での代表的・典型的視座は、生活史研究の分野で自分が慣れ親しみほとんど‘自明視’している発想や視座（＝切り込み方）とは、（時には微妙に、時には大きく）異なっている可能性が大きいだけに、そうしたズレの認識や思考実験的な突き放しの作業を通して、一方では自分が現に採用している発想や視座の有効性や限界、さらには展開力などを（再）検討する機会に否応なく恵まれることになり、他方では、言わば‘セレンディピティ（＝幸運な偶然的出会いと意味の発見）’の論理を体現する形で⁶、自分が採用してみると面白いかもしい視座上のヒントのようなものと出くわす可能性も否定できないからである。

本稿では第1点と第3点とを中心にして議論を進めることにしたいが、その前に、**＜生活史研究生成/産出の基本イメージ＞**に触れておく。これは、現時点におけるぼく自身の生活史研究観を再確認しておきたいからであり、またそのことを通して、生活史研究をするという言い方でぼくがどういったことを考えているのか、という点を読み手と共有するための手がかりを提供しておきたいからである。

ここで＜生活史研究生成/産出の基本イメージ＞と呼んでいるのは、どのようにして生活史研究が生み出されてくるのか、という点についてのぼくの基本的見解のことであるが、これは、次のように言い表わすことができるだろう。

つまり、(1a) ‘生活史素材’⁷とそれを加工・料理しようとしている（もしくはそれに働きかけよう/取り組もうとしている）(1b) 研究者の‘眼差し’や‘視座’があって、(2a) 素材群と研究者の視座との相互作用の過程（interactional processes）で(2b) データ群の選択・絞り込みがなされてくることになり、そうした(3) データ群とのさらなる格闘（ここで言う‘格闘’とは、データ群を研究者の議論の中でどう位置づけどう入れ込み、それなりにまとまりのある‘研究’という水準に競り上げていくためにどういう議論を提示していくべきか、提示することができるか、といった点をめぐる研究者自身の模索の試みのこと）の結果＝帰結として(4) 生活史研究なるものが生み出されてくる、というものである。

この＜基本イメージ＞を踏まえて言えば、本稿での興味関心は、上記の(1a)(1b)(2a)(2b)(3)といった点について、近接する研究分野の諸業績——実際には、ミクロの歴史学の諸業績——はどういった示唆を提供してくれているのだろうか、という点にある⁸。

以下、本稿での議論の進め方について簡単に触れておこう。

まず、初めにミクロの歴史学の概要を述べた後その諸特徴を次の二つのステップを踏む形で紹介することにする。第1のステップでは、20世紀の欧米の歴史学の動向について触れているG・イグガース (Iggers) の議論のなかでミクロの歴史学がどのように把握されているのか、という点を紹介する(→〈2.1.〉)。次に第2のステップとして、G・レヴィ (Levi) やC・ギンズブルグ (Ginzburg) といったミクロの歴史学を実際に担い実践していった研究者たち自身が自分たちがやってきていることを振り返りながら出している特徴づけをばくになり箇条書的に掬いあげてきたものを提示する(→〈2.2.〉)。

この諸特徴の紹介を踏まえて、第2には、生活史研究に対してどういった示唆的議論や知見が見られるか、という観点から、それらの特徴のいくつかについて、より詳しく紹介・検討を行なっていく(→〈3.〉)。

そして生活史研究とミクロの歴史学との位置関係について見通しを与えた上で(→〈4.〉)、最後に小括的にミクロの歴史学からの示唆を提示することにしたい(→〈5.〉)。

2. ミクロの歴史学 (microhistory) の諸特徴について⁹

ミクロの歴史学とは何か。まずはその概要を見ておくことにしよう¹⁰。

ミクロの歴史学は‘私的なもの’‘個人的なもの’‘生きられた体験’を主要な研究対象とし‘下からの歴史’への志向性を強く持っている (Ginzburg and Poni [1979=1991 : p.4,p.7])。このミクロの歴史学を提起した主要な系譜としてはイタリア学派とドイツ学派とを挙げることができるが (Iggers [1997 : pp.101-117])、本稿で検討の焦点におかれているのは、そのうちのイタリア学派を中心とした動きである。この学派の生誕は、1970年代後半から1980年代、北イタリアはボローニアの地に集まった歴史研究者たち (C・ギンズブルグ、G・レーヴィ、E・グレンディ [Grendi]、C・ポーニ [Poni] など) に求めることができる。

彼らは、一方でGinzburg and Poni (1979=1991) という形で、当時支配的であった科学主義的・数量志向的なマクロの歴史学に対する強烈な対抗意識を持った歴史学、ミクロ次元に焦点化した歴史学の調査研究プログラムを提起すると共に、他方ではエйнаウディという出版社から《ミクロストリア》——厳密には複数形で《ミクロストリエ》(Microstorie) ——と銘打った歴史叢書(上村 [1994 : p.107]) を刊行している。この歴史叢書に属するものとしては、ギンズブルグの『ピエロ・デッラ・フランチェスカの謎』(1981=1998) やレヴィの『無形の遺産』(1985=1988)、N・デーヴィス (Davis) の『マルタン・ゲールの帰還』(1983=1985) などがある。その他に、この叢書以前の出版でしかもミクロの歴史学的業績としては(正当にも) 広く知られているギンズブルグの『チーブとうじ虫』(1976=1984) がある¹¹。そして1990年代初めには、レヴィ (1991=1996)、Muir (1991)、ギンズブルグ [2006 (原著1994) =2008] といった形で「10年後の中間総括」(上村忠男) 的展望論文や

著作が相次いで出版されている¹²。

2.1. G. Iggers [1997] の場合：

それではミクロの歴史学は何を目指しているのかという点について簡潔な把握を見せているイグガースの議論でその特徴を見ていくことにしよう。Iggers [1997 : p.109] によれば、ミクロの歴史的議論展開の特徴は、

〔い〕 既成のマクロの歴史研究において置き去りにされてきた人びと・民族・一般民衆こそを歴史研究の主要な対象として設定し、

〔ろ〕 彼らが暮らす小集団レベルで生起しているはずの歴史的因果関係の解明を目指す、という点にあると言えるようだ。これに、《ある特定の地域に暮らす個人への〔研究対象の〕集中と、より大きな規範からのこの地域環境の違いを強調する試み》(p.111)¹³や《文化の再発見と歴史変革＝変化の担い手としての個々人と小集団の個性》(p.112) という指摘を加えると、ミクロの歴史学は、＜歴史変革の担い手＝推進者として一般庶民・一般民衆とその文化とを位置づけ、マクロな規範的傾向から外れた地域内個人の主題化を行なう＞という特徴を持っていると把握されていることになる。その意味で、特定の地域内個人の特殊性・特異性を際立たせるのがその特徴といえることができるだろう。

このようにミクロの歴史学では周辺的人間存在に焦点を当てているわけだが、なぜそうした対象者の選択をするのか、つまり、ミクロの歴史学におけるサンプル選択の基準もしくは論理はどうなっているのかという疑問がわいてきておかしくない。この点については後に〈3.1.〉の末尾と〈3.2.〉でみることにしよう。

2.2. ミクロの歴史学の実践者たちを中心にした展望論文情報の場合：

今度は、ミクロの歴史学の実践者たちを中心にした展望論文情報の場合¹⁴である。ぼくの見るところ、ミクロの歴史学の特徴としては、大きく次の6点を挙げることができる。

第1点は、＜‘観察規模’をミクロにし‘分析モード’をミクロで＞という形で定式化できるものである。この定式化は、＜観察の規模の縮小＞と＜(文書資料の)顕微鏡的分析と集中的研究＞の2つと言い換えてもいいもので、要するにミクロの歴史学を特徴づけている基本的な作業モードについて触れたものである。

第2点は、分析、議論開始の際の着目点として‘隙間・裂け目・矛盾点’などが選ばれてくるということである。ミクロの歴史学においては、そうした特徴を持った‘変則的なもの’が注目を浴びる傾向がある。

第3点は、‘分析の二正面作戦’と名付けることができるだろう。直接的には、＜‘生きられた体験’と‘不可視の構造’の双方への眼差し＞のことを念頭に置いてこう言っているのだが、ある論者の特徴づけでは、(人類学の分野で言うところの)‘エミック’と‘エティック’の観点の採用と見なすことができるものである。

なお、このく‘生きられた体験’と‘不可視の構造’の双方への眼差し>の議論の一構成契機である‘生きられた体験’論に引きつけて言えば、ここにはく‘個人’‘個性的なもの’‘人間的なもの’‘生活体験’への眼差し>を指摘することができる。

第4点としては、く‘特殊なもの’から出発して特定のコンテキストとの関連でその意味を確定してくる>というやり方をあげることができる。第3点で用いた用語を使って言えば、‘生きられた体験’から出発して‘不可視の構造’を析出してこようとする試みを念頭に置いた特徴づけと考えればわかりやすいかもしれない。

第5点は、く二重のストーリーの析出と産出>という発想である。二重のストーリーとは、研究対象そのものに関する中心的ストーリーと、そのストーリーを記述する研究者自身が、なぜ、あるいはどのようにして研究対象や研究テーマに関わるようになったかという事情などを語る副次的ストーリーのことである（Simon [2009 : p.2] ;Levi [第2版2001（第1版1991）：pp.109-110= 1996:pp.123-124]）。この特徴は、研究対象に関する記述を行なっていく際にその一環として研究者自身の視点を組み込んでくるべきであるという主張と実践（Iggers [1997 : p.110]）、並びに記述の際に資料上の‘欠落部’の組み込みを積極的に行なうべきであるという議論（ギンズブルグ [2006（1994）=2008 : pp.185-186,p.257]）とも関係している。

最後に第6点として、レトリック論的歴史理解に対するアンチの姿勢を見て取ることができる（ギンズブルグ [2006（1994）=2008 : pp.198-200]）。これは事実とフィクションとの関係性に関するミクロの歴史学の立場を鮮明に打ち出したものである。

3. ミクロの歴史学的営みの注目点は何か：

それでは、くミクロの歴史学的営みの注目点は何か>という点の紹介・検討に移ることにしよう。ミクロの歴史学的営みから何を吸収してることができるのか、吸収すべきなのか、という観点から——つまり、く生活史研究の展開にとっての示唆・ヒントを探る>という、ぼくの観点から——すると、どこが（あるいは何が）注目点となるのだろうか。ここでは、大きく次の〔a〕から〔d〕までの4つについて、ある程度の詳しきで見ていくことにする。

それらは、

〔a〕（二重の意味での）ミクロ的实践の遂行（→〈2.2.〉での特徴の第1点）；

〔b〕（分析、議論開始の際の）着目点としてのく変則的なものや裂け目・隙間・矛盾点等>とその含意（→第2点）；

〔c〕ミクロの歴史学における分析の二正面作戦（→第3点）；

〔d〕個別事象とそれを超えるものとの関連づけ方をめぐる問題（→第4点）；
である¹⁵。

3.1. （二重の意味での）ミクロ的实践の遂行：

‘歴史的事象’に取り組む際の基本的な作業モードである【a】（二重の意味での）**ミクロ的实践の遂行**という点から始めよう。これは先に、＜観察規模をミクロにし分析モードをミクロで＞という定式化で紹介しておいたものである。テキスト的に確認しておけば、「実践としてのミクロストーリーは、本質的に、観察規模の縮小に、文書資料の顕微鏡的な分析と集中的な研究に、基礎を置いている。」（Levi〔2001（1991）：p.99=1996：p.110〕）となる。これこそが、ミクロの歴史学の基本戦略・基本的立場の表明と考えていいだろう。つまり、観察規模をミクロ水準に焦点化するということと、分析の仕方を細かく精緻にやっていくという意味でのミクロ分析、この2つである。

この点を有名なギンズブルグの『チーズとうじ虫』で確認しておけば、そこでは、16世紀に《完全な闇のなかでその人生を過ごしたあと、教皇庁の命令にもとづいて火炙りの刑に処されて死んだフリウリ地方のひとりの粉挽屋で、人びとからはメノッキオと呼ばれていたドメニコ・スカンデッラの話》（ギンズブルグ〔1976=1984：p.2〕）が、とりわけ彼の思想世界に肉薄する形で丁寧に語られていた。ここで展望論文の中で触れられている諸業績を使って、**＜観察規模をミクロ水準に焦点化すること＞のイメージ**をさらに見ておくと、ミクロの歴史学のイタリア学派を紹介したMuir〔1991:p.x〕では【いかさま酒造家；教会資産の匿名の略奪者；告訴された魔女；心をかき乱す幻覚に襲われた小農；サンゴ採集とオリーブ栽培で知られた小さな町の住民たち；都会の病院で救いを求めた未婚の母たち】などが研究対象として挙げられており、ミクロの歴史学に関する刺激的な論考と言っているギンズブルグ〔2006(=原著1994)：pp.200-201〕では【19世紀のピエモンテ地方の紡績工の共同体；16世紀のリグーリア地方の渓谷の村落；モッソ渓谷やフォンタナブオーナ渓谷のような土地】などの集中的研究が、さらにLevi〔2001(1991)：p.101=1996：p.113〕では、より詳しく【ピエロ・デッラ・フランチェスカの文化的世界を調べる手段として1枚の絵に焦点を合わせて、その中の人物たちが誰かを確認する作業；17世紀の農民たちの精神世界を明らかにするために行なわれたコーモ地方のある小村落における同族結婚戦略の研究；ある小さな織物業の村で観察される機械織機の導入を手がかりに、技術革新、そのリズムや影響といった一般的テーマを説明しようという試み】といった例が挙げられている。

それでは、なぜミクロ水準に焦点化するのか、と言えば、顕微鏡的観察をすれば、それまで観察されていなかった諸要因を明らかにできるようになるはずだという信念があるからである（Levi〔2001（1991）：p.101=1996：p.112〕）。レヴィはこの点を、《西ヨーロッパ諸国の多くやアメリカ植民地で行なわれていた土地取引》を対象にして土地の商業化局面で見られた市場の特徴——《未だ脱人格化されていない市場における商取引で作動している社会的諸規則》の特徴——についての議論で例証している。そこでは、大きく次の2つの事情が歴史家＝研究者の事実認識にブレを生み出していたと言う。一つは、データの質の影響。もう一つは歴史家自身が自覚しないままに持ち込んでいた自身の発想に潜んでいるバイアスに対する無自覚の影響である。

第1の事情というのは、《多くの解釈が集散的なデータに基づいて》いたことである。その結果、《取引そのものについての具体的な諸事実の検討》にブレが生じてきたのである¹⁶。

もう一つの事情は、《みずからの近代的な商業的メンタリティー》を鵜呑みにしていたことであ

った。つまり、《市場の力が非人格的であるという〔研究者自身が拠って立つ〕仮定に疑問を差し挟むこと》がなかったのである。そのことは二重の帰結を生むことになった。一つは、《土地のさまざまな質を考慮に入れたとしても、関係する価格が極端に変化に富んでいることに誰も気づかなかった》という‘目隠し’効果であり、もう一つは、《同時代の公証人証書のなかに見いだされる大量の金銭による土地取引を、自動調整的市場の存在を示す証拠であると解釈する方向》でのブレである。

レヴィは、《観察のスケールを極端に局地化された地域に限定することによって》このブレを発見する。つまり、《土地の価格が契約当事者の血縁関係にしたがって変化すること》や《同じ大きさと質の土地について異なった価格が請求されていたこと》が発見されたのである（以上、Levi [2001 (1991) : pp.101-102=1996 : p.113] ; なお、訳文の中への〔 〕の挿入は、引用者である水野が文意を考えて補足したものである。以下、同じ）。

この例証を踏まえてここで押さえておきたい重要な点は、研究上、方法上の‘革新’という狙いと関係で規模の縮小という試みをやってみる、という発想を採用しているということである。これは重要なポイントなので、別の引用で見ておくと、《…われわれは規模の問題を観察された現実の規模の問題としてだけではなく、〔イ〕実験的目的のための可変的な観察の規模の問題としても議論すべきであるように私には思われる。》（Levi [2001 (1991) : p.101=1996 : p.112]）という具合になる。‘規模の問題’は事実上‘観察された現実の規模の問題’という形で進行している、という点があるわけだが、その点を認めた上で、なぜ後者の路線で行くのか——つまり、なぜ観察の規模をミクロ水準に焦点化するのか——と言うと、実は〔イ〕的な問題関心、つまり、研究者の側に新たな‘実験’的試みをやってみようという狙い・目的があって、言わばその手段として観察規模を色々を変えてみるとどうなるかという具合に考えていることがわかる¹⁷。

このように、ミクロの歴史学においては＜観察規模のミクロ的次元への焦点化＞が見られるわけだが、そうした場合には、そもそもなぜそうした細部へのこだわりが正当化されるのか、つまり、ミクロ的なものへの着目を正当化する理屈としてはどんなものがありうるか、について考えておく必要があるだろう。というのも、細部は（些末な細部も含めて）いたるところに見受けられるのだから、なぜある特定の‘細部’が重要なのかについて、それなりに根拠のある理由づけがあらかじめなされていないと、その議論は説得力を失ってしまうはずだからである。

ここではギンズブルグが《顕微鏡的な細部への情熱》（ギンズブルグ [2006 (原著1994) =2008 : p.166]）と呼んでいるもの、もしくは＜ミクロ的なものへの着目＞を何が保証・正当化するのか、という点について、‘ミクロの歴史学’という用語自体の使われ方について跡づけたギンズブルグ [2006 (1994) =2008] での議論を紹介する形で検討を加えておくことにする。

そこではミクロ的なものへの着目を正当化する理屈として次の4つが挙げられている。

第1は、そのミクロ的なものが‘**決定的瞬間**’だからというものである。ギンズブルグは、その例としてアメリカの歴史学者ジョージ・R・スチュワートの『ピケットの突撃——1863年7月3日、ゲティスバーグにおける最後の突撃のマイクロヒストリー』（1959）の場合を挙げている。この歴史

学者がなぜ‘ピケットの突撃’を取り上げるのか、という点、それは、その事件が、まさに《「戦争のクライマックス中のクライマックス、わたしたちの歴史の中心的な瞬間」》（ギンズブルグ〔2006（1994）＝2008：pp.166-167〕）と見なされているからである。

第2は、ミクロ的なものが‘**典型**’だからというものである。これは、ルイス・ゴンサレス・イ・ゴンサレスというメキシコ人学者が挙げている理由である。《この本（→ゴンサレスの著書である『騒擾の村ーサン・ホセ・デ・グラシアのミクロストリア』〔1968〕）は、あるちっぽけな「忘れられた」村が四世紀のあいだにどのように変化したかを研究している。しかし、規模の小ささは、典型性によって賸われている。》（ギンズブルグ〔2006（1994）＝2008：p.167〕）。

第3は、ミクロ的なものがまさに‘**マイナー**’なものだから、というものである。この理屈が見られるのはリチャード・コブの場合で、《…コブにとって唯一の関心事である雑報記事の事件を政治的事件に対置しようとする。…それは実質上、偉人や権力者を中心にした歴史学にたいして、マイナーな歴史学を称揚したものであった…》（ギンズブルグ〔2006（1994）＝2008：pp.173-174〕）。

最後に第4の理屈としては、ミクロ的なものが**特異性を持っているから**、というもので、そこには研究者による＜‘質的’‘評価的’に重要＞という判断が介在している。この第4の理屈＝理由づけは、第1の理屈とも関連があるものだが、実は、ギンズブルグらが提起するミクロの歴史学で挙げられている理屈＝理由づけは、この第4の系列に属するものなのである。この点に関連して、ギンズブルグ〔2006（1994）＝2008〕は《イタリアのミクロストリアの研究者たちは…だれひとりとして、自分の立場がジョージ・スチュワートの近写的な「事件史」ともルイス・ゴンサレス・イ・ゴンサレスの地方史ともリチャード・コブの「ちっぽけな歴史」とも同じだとは認めないだろう。》（pp.175-176）と述べている。いかなる意味で‘特異’と見なされているのか、という点については、すぐ次の〈3.2.〉で説明する。

3.2. 着目点としての＜変則的なものや裂け目・隙間・矛盾点等＞とその含意：

＜ミクロ的なものが特異性を持っているから＞という第4の理屈を特徴とするミクロの歴史学の場合、＜ミクロ的なものへの着目＞という時、一体どこに（あるいは、何に）着目するのだろうか。

基本にあるのは、‘例外的なもの’‘変則的なもの’という意味での‘特異性’である。つまり、研究者の観点から見て何か‘中心的’とか‘正常’と判断される現象があって、その‘中心的なもの’や‘正常なもの’から外れたところこそが着目点とされるのである¹⁸。例えばN・デーヴィスが『マルチン・ゲールの帰還』で注目したニセ亭主事件のように普通はあまり見られない《異常な出来事…や“例外的で正常な”歴史的エピソード》（Brown〔2003：p.11〕）と呼ばれるものがこれに当たる。先に上で紹介したいかさ酒造家や教会資産の匿名の略奪者といった事例や《社会の周辺にいる人々や集団》（Muir〔1991：p.xxiii〕）のような‘周辺のなもの’への着目もその1変種と見なすことができるだろう。

‘例外的なもの’‘変則的なもの’というこの基本的な把握を前提にしながら、とりわけイタリア学派が好んで着目するのが、‘裂け目’や‘隙間’‘矛盾点’という意味での‘特異性’である。つ

まり、研究対象として想定している全体社会や文化の中に例外的に見て取れる‘裂け目’や‘隙間’‘矛盾点’にスポットが当てられるのである。例えば、ギンズブルグが自分の研究対象の焦点を説明する際に魔女裁判の研究との関連で《それまで無視されていたあるひとつの信仰の水脈、ペナンデンディをめぐる流れている水脈を発見したことだけが、このスクリーンのなかに裂け目を入れたのだった。裁判官たちの尋問と被告人たちの返答とのあいだにみられるずれを通して、尋問者たちの暗示にも拷問にも帰すことのできない不一致を通じて、なによりも自立的な民衆の信仰の深部になる層があらわれてきたのである。》(ギンズブルグ [1976=1984 : p.12]) と述べているが、この下線を引いたくだりこそが彼の着目点なのである。

以上を総括する形で、先に〈2.2.〉で [b] (分析, 議論開始の際の) **着目点としての<変則的なものや裂け目・隙間・矛盾点等>という定式化**を挙げておいたのである。

では、そうしたところに、なぜ着目するのか。それは、‘異質なものの存在可能性’の示唆¹⁹(→ギンズブルグ [2006 (1994) = 2008 : pp.201-202] では《ありそうにもない資料こそが潜在的にもっとも豊かな可能性を秘めているという仮説》が提起されている)や‘失われたもの’の発見への示唆(→Muir [1991 : p.x] では《現在では失われてしまっている考え方への手がかりを与えてくれる》可能性が指摘されている)を見出すことができると考えられているからである。

ここに見られるのは、<変則的なものや裂け目・隙間・矛盾点等>の存在が暗示している理論的展開力なのだが、前者の‘変則的なもの’については、〈3.6. <ミクロからマクロへ>と繋げる2系列の議論〉でより詳しい紹介・説明を行なうことにして、ここで注目しておきたいのは、後者の‘裂け目・隙間・矛盾点’への着目と密接に関連のある<人間の自由意思と規範システム>に関する議論である。これはG・レヴィやC・ギンズブルグに代表されるミクロの歴史学のイタリア学派に特徴的なものである。

<人間たちは彼らもしくは彼女らを取り巻く世界の中でどういった行動をしているか>。イタリア学派の議論に目を通して見ると、彼らは、世界内での人間行動に関する非常に鮮明なモデルを持っていることがわかる。それは、‘世界内の人間行動’に関する行為・対立モデル(an action and conflict model of man's behavior in the world)とでも呼べるもので、このモデルの前提的背景には、次のような二重の確信が控えているようである。つまり、一方で人間の‘自由意思’の存在についての確信と、他方での‘人間社会の一般的構造’の拘束的性格についての確信、この二重の確信が、それである(Levi [2001 (1991) : p.98=1996 : p.109])。

この点に関するぼくの見解を述べておけば、前者、つまり、人間の‘自由意思’の存在についての確信の方は、ぼくも共有するのだが、後者の確信、とりわけ、拘束や縛りの主要な源泉が規範システムにあるとされている点に関しては、微妙な違和感を持っている。彼らは、個々人と規範システムとの諸関係に関する基本的構図を、‘個々人の自由’と‘規範システム’による拘束・縛りとの緊張関係に求めようとしているのだが、そこでは、あらかじめ規範システムの持つ‘拘束性’の側面が強調されており、この点を指して、ここでは‘(規範システムに関する)拘束性バイアス’と呼んでおく。ぼくがそうした把握の仕方に異論があるのは、研究対象である現象(ここでは‘規範シス

テム’、より一般的には‘人間社会の一般的構造’）の特質の理論的把握（Levi〔2001（1991）：p.99=1996：p.109〕）という議論脈絡においては、本来なら（と言うか、‘構造とエージェンシー’論についてのM・アーチャー（Archer）らの議論²⁰を踏まえるなら）、論理的にも経験的にも、規範システムの多様な影響の現れ方がありうることに目配りしておくことが必須だと考えているからである。（経験的には多様な現れ方を観察するところから始める必要があるだろうが）論理的可能性としては、彼らが注目している‘拘束（constraining）’の側面・契機だけではなく、‘可能（enabling）’の側面・契機——つまり、規範システムが存在するが故に、その中で生きていく人々の諸可能性の開花が促進もしくは推進されていくことがありうる、という側面・契機——が作動することも想定できるはずであり、さらに言えば、規範システムの中のあるセクターで生きていく人々には‘拘束’として作用し、まさにそれ故に別のセクターで生きていく人々には‘可能性’を提供する形で作用するといった場合もありうるはずである²¹。

それはともかく、彼らの議論で面白いところは、そうした拘束的性格を持った複数の規範システムが存在し、それらの間には多様な隙間や裂け目、相互矛盾が存在するという点、そして、まさにそうした裂け目や矛盾があることこそが個々人の自由の余地を生み出してくる仕掛け・仕組みなのだ、という具合に両者を繋げて考えている²²点である（Levi〔2001（1991）：p.99=1996：p.109〕）。これを先に言及しておいた（分析、議論開始の際の）着目点としての＜変則的なものや裂け目・隙間・矛盾点等＞という点と関連づけて言えば、＜変則的なものや裂け目・隙間・矛盾点等＞が‘複数の規範的システム間の諸矛盾’を体現しているからこそ、そうした注目がなされているのだ、ということになる。

この関連で紹介・検討しておきたいのは、**社会変化についてのイタリア学派の考え方**である。

レヴィは社会の変化に関して次のような見解を述べている。

《機能主義が全体レベルでの社会的な整合性（social coherence）を強調するのとは対照的に、ミクロの歴史学者たちは〔イ〕複数の規範的システム〔間〕の諸矛盾に、したがって、諸観点の断片化や諸矛盾、複数性に、その関心を集中させてきたということを私は指摘したい。そうした集中のさせ方をするによって、あらゆるシステムは流動的で開かれたものとなる。〔ロ〕変化は矛盾した複数の規範的システムの隙間で遂行される微細な無数の戦略と選択によって生じるものである。》（Levi〔2001（1991）：pp.110-111=1996：p.125〕）

この引用に見られるように、レヴィらの研究の焦点が〔イ〕＝‘複数の規範的システム間の諸矛盾’にあることは明らかである。さらに言えば、そうした諸矛盾が、個々人の自由を含めて、社会システムの流動性と開放性を生み出してくるのであり、社会の変化は常に、相互矛盾しあう複数の規範的システム間の隙間で採用される戦略や選択によって生起してくる（→〔ロ〕の主張）、という具合に考えるとところにイタリア学派的議論の特徴があるといえることができる。

問題は、ここに紹介したような発想だけでミクロ水準の問題群に接近するべきかどうか、という

ことになるだろう。ぼくとしては、接近する際のあり得る視角の一つとして、（取り上げる‘歴史事象’次第では、有力な一視角として）〔イ〕を視野に入れておく、というところまでは賛成なのだが、はなからこの視角だけでやっていくというやり方には反対である。なぜ反対なのか。この発想の問題点は、‘変化’は常に、相互矛盾しあう複数の規範的システム間の隙間で採用される戦略や選択によって生起してくる、という具合に、研究の焦点があらかじめ決めつけられている点である。これは、彼らの基本視角が生み出す特徴的バイアスと言っていいだろう²³。なぜバイアスと呼ぶのかと言えば、もっと多様な変化の生起可能性について開かれていないと、ここで焦点化されているのは違ったタイプの変化が生起してきたとしても、その事象を取り逃がしてしまう可能性があるからである。

ここでは<複数の規範システム間の諸関係の理論的把握はいかにして可能なのか>という問題が問われていると考えることができるだろう。そうした理論的把握に取りかかるには——‘経験的なもの（the empirical）’と‘理論的なもの（the theoretical）’との関連づけ方に関する各論者のメタ理論的スタンスの違いによる、ということになるだろうが——（い）前段の作業として、あるいは、（ろ）そうした理論的把握作業の一環として（ちなみに、ぼく自身はこの後者の立場である）、経験的に生起する可能性のある様々な事象を視野に入れておくということは、最低限の必須事項となるはずである。

（ろ）の立場に立つぼくとしてさらに言えば、‘経験的なもの’を潜り抜けるという形で‘経験的次元’への目配りをしながら、複数の規範システム間の諸関係についての仮説的定式化を言わば螺旋状的に練り上げていくというやり方こそが望ましいと考えている。‘経験的’事象を対象にしてこれを解明することを狙いとする理論的営みは、言わば‘唯我独尊’的に理論内に閉じこもって演繹的にのみ行なわれるべきものではなく、常に‘経験的次元’に開かれながら、その次元からのチェックや異議申し立てを受けとめつつそれらへの応答の形で進められていく性質のものだと考えるからである²⁴。

3.3. ミクロの歴史学における分析の二正面作戦：

ここでは、まず始めに‘生きられた体験’と‘不可視の構造’の双方への眼差しの議論を紹介し、次に、人類学の分野で用いられている用語である‘エミック’と‘エティック’という対になる観点から、この議論の持ちうる含意の一つを照らし出す、という形で話を進めていく。

Ginzburg and Poni [1991] は、先に〈2.〉の冒頭部分で触れておいたように、ミクロの歴史学という方向性を持った調査研究プログラムを提起したものだが、彼らはそこで次のような形で〔c〕分析の二正面作戦の議論を展開している。

《…ミクロ歴史学的分析には二つの正面がある。その分析は、一方で、縮小した規模でなされることによって、多くの場合、‘リアルな生活’の再構成を可能にする。そうしたことは他の種類の歴史叙述では考えることができないものである。他方、その分析は、不可視の構造の

調査探求を提案する。その不可視の構造の中でこそ生きられた体験がはっきりと表現されるのである。》(p.8)

分析の二正面作戦という場合の正面の一つは‘リアルな生活’の再構成のことであり、これは、ミクロの歴史学に特徴的なやり方である〔観察〕規模を縮小することを通して可能になる、とされている。ここで‘リアルな生活’と言われている内容を、彼らはその生活を現に体験しながら生きている個々人に注目する形で‘生きられた体験 (lived experience)’と呼んでいるのである。他方、もう一つの正面というのは‘不可視の構造 (invisible structure)’、つまり、そうした‘リアルな生活’を生きている本人たちには見ることができず研究者による探求・調査研究によって初めて浮かび上がってくると想定されている‘不可視の構造’である。

このようにミクロの歴史学は‘生きられた体験’と‘不可視の構造’の双方への眼差しを持っているのだが、ミクロの歴史学のミクロの歴史学たるゆえんは、‘生きられた体験’を客観化された‘不可視の構造’というコンテクストの中に位置づける点にある。つまり、一方で‘生きられた体験’を浮かび上がらせると同時に、その‘体験’を、研究者側が設定（もしくは析出）する形で提示してくる客観化された‘不可視の構造’の中に位置づけるということである (Ginzburg and Poni [1991 : p.8])²⁵。

それでは次に、この‘生きられた体験’と‘不可視の構造’の双方への眼差しの議論を、Z・サイモン (Simon) に従って‘エミック’と‘エティック’の観点から位置づけ直してみることにしよう。

まずは‘エミック’的アプローチと‘エティック’的アプローチの特徴の確認から。

《‘エミック’的アプローチというのは、研究者²⁶の好奇心が歴史的行為主体たちの観点に向けられているという意味である。…〔他方、〕‘エティック’的アプローチとは、研究者の興味関心が歴史的行為主体たちを記述することに——つまり、研究者自身の観点から研究者自身のカテゴリーを採用することによって記述することに——向けられているという意味である。…‘エミック’とは、行為主体たちの‘幻想’を無視しないことなのである。》(Simon [2009 : p.4])

末尾の《‘エミック’とは、行為主体たちの‘幻想’を無視しないことなのである》という大変わかりやすい基本姿勢に端的に示されているように、‘エミック’的アプローチにおいては、可能な限り対象者に寄り添う形で対象者の視点・発想・カテゴリーを通して物事を見ていくことが重視されている。対象者の側の‘生きられた体験’に言わば波長を合わせながら‘同調 (シンクロ)’していくやり方である。他方、‘エティック’的アプローチでは、研究者の側の研究視点・発想・カテゴリーを用いて対象者の世界の意味づけ・位置づけを行なおうとする。こちらでは‘不可視の構造’の析出への興味関心が優位を占めるわけだ。

ここには＜対象者の世界に入り込みながらその世界から距離を取る＞という研究者に要請される二重の動き、両者の使い分けと関連づけとをどういう具合にやってのけられるか次第で研究者としての‘力量’が試されざるをえない二重の動きを見て取ることができるだろう。‘同化’と‘異化’という対の用語を用いて言えば、この二重の動きは、＜‘同化’の論理の体現としての‘エミック’的アプローチ、‘異化’の論理の体現としての‘エティック’的アプローチ＞と定式化することができるかもしれない。そしてこの‘同化’の論理というのは（対象者への）‘乗り移り’‘同調（シンクロ）’‘憑依’の論理として、そしてまた‘異化’の論理の方は（対象者から）‘距離を取る’論理、（対象者を）‘突き放す’論理として特徴づけることが可能である。

この二重の動きが抱え込んでいる困難な問題を、‘エミック’の契機と‘エティック’の契機とのすり合わせという論点に即して考えてみることにしよう。

ミクロの歴史学の議論にこの両契機が見られることは、すでに触れてきた＜‘生きられた体験’と‘不可視の構造’の双方への眼差し＞という言い方からも＜‘生きられた体験’を客観化された‘不可視の構造’というコンテキストの中に位置づける＞という定式化からも明らかである。‘エミック’の契機と‘エティック’の契機とのすり合わせという点に関しては、例えば次のような議論が見られる。

《ギンズブルグがメノッキオについて書いていることを読むのは、彼が民衆文化について書いていることを読むのと同じように刺激的なことである。しかし、彼がこの両者の間に想定している関係に関する彼の議論を読むと、〔彼は〕2冊の本を、つまり、1冊はこのテーマで、もう1冊はあのテーマで、といった形で〔イ〕2冊の本を、別々に書いていた方がよかったのではないか、という気になる。》（Simon [2009 : p.4]）

この論者は、『チーズとうじ虫』におけるギンズブルグの議論の仕方に不満らしく、＜“エミック”論と“エティック”論とはバラバラに展開すべきである＞と主張している（→〔イ〕）のだが²⁷、ぼくとしては、この主張には反対である。まさにこの両者の契機を入れ込んだ形での分析と記述の仕方がどのようになされているか——つまり、調査研究の中での対象素材の分析・検討局面で、そしてまた研究成果を提示する局面で、‘エミック’の契機とどのように向き合いこれをどのように生かすのか、生かせるのか、‘エティック’の契機をどういう理論的根拠からどこで‘動員’し、どのような形で‘エミック’の契機と関連づけていくのか、またそうした関連づけを正当化し根拠づける理由をどの程度説得力を持って提示できるのか、そういった点——こそが、ミクロ歴史学的研究の真価が試される一番のポイントなのであり、研究者としての‘力量’の見せどころのはずだ、と考えるからである²⁸。

3.4. ＜‘個人’‘個性的なもの’‘人間的なもの’‘生活体験’への眼差し＞:

上記の＜‘生きられた体験’と‘不可視の構造’の双方への眼差し＞の議論の一環として、つま

り、その議論の一構成契機である‘生きられた体験’論との関連で、＜‘個人’‘個性的なもの’‘人間的なもの’‘生活体験’への眼差し＞を指摘することができる。

Iggers [1997 : p.103] の指摘にもあるように、ミクロの歴史学においては、‘多くの人々’に属する層（いわゆる‘庶民層’と考えていいだろう）を研究対象として設定しながら、そうした人々を群衆の一部として取り扱う（これはそうした場合に見られがちな傾向であるが）のではなく、一人一人の個人として理解しようという志向を読み取ることができる。その典型はギンズブルグの『チーズとうじ虫』論であって、そこでは《…もし文書記録が、たんに個々に識別されない大衆だけではなく個別的人格をも再構成する可能性を私たちにあたえてくれるものであるなら、その可能性をしりぞけるのは不条理なことであろう。「個人の」歴史という概念を社会的下方に拡大していくことは決してつまらぬ目標ではない》（ギンズブルグ [1976=1984 : p.13]）という観点から異端裁判にかけられていた一介の粉挽屋メノッキオの能動的思想世界の発掘が意識的に追求されている。ちなみにIggers [1997 : p.103] では、そうした志向性の一つの含意として‘具体的なもの知 (knowledge of the concrete)’を可能にする認識論の必要性が提起されている。興味深い指摘と言っていいだろう。

さらにこうした議論の一環として、実は、ミクロの歴史学では、どのような形で‘歴史の人間の・人格的側面’の探求・把握を行なうことが可能かという問いかけがなされているのだ、と言う (Iggers [1997 : p.116])。こうした問いかけの中には＜‘個性的存在’としての個々人の存在をどう主題化し、どう把握するか、把握できるか＞という個人生活史研究の問題関心と通底する課題設定を見て取ることができる²⁹。

この関連で注目すべきなのは、ミクロの歴史学のこうした‘生きられた体験’へのまなざしが示唆している方向性が、個々人の社会的・時代的体験の実相に肉薄していこうという動きと連動している、という点である。自然科学の‘権威’が高まるにつれて医療や看護の現場では、自然科学的・数量化至上主義的傾向を体現する形で《臨床の歴史と生活史の収集・集積が実験室での分析や統計的調査に取って代わられていく動き》(Muir [1991 : p.xvi]) が根強く見られるわけだが、そうした動きのみが先行する場合に支配的になりがちな思考様式は、《個々人のアイデンティティを消し去っていく過程》(Muir [1991 : p.xvi]) ——ミクロの歴史学の観点から言えば、《個々人〔という存在〕を歴史から消去・排除する動き》(Muir [1991 : p.xvi]) ——の一翼を担っていると見なすことができるだろう。というのも、そうした思考様式を採用する人々にとっては、＜臨床現場での人間存在の把握にとって、その現場に身をさらしている個々人（とりわけ患者やその家族など）が体験していることの意味を視野に入れることが大切だ＞といった認識はあまり意味を持たない可能性が高いからである。

例えば、G. Pomata [1991] は、19世紀後半から20世紀の30年代にかけてのイタリアの孤児院や母子病棟での未婚の母親を対象にした労作であるが、彼女は、そこで、

〔い〕 19世紀後半から20世紀初頭にかけての（産婆に対する）産科医の社会的地位の相対的優位が確立・浸透していく時代の中で、

〔ろ〕 20世紀初頭における細菌学の時代の革新的動きにも後押しされる形で、

〔は〕絶対的貧困の脅威の下，社会的・ジェンダー的差別と偏見にさらされていた未婚の母親たちの体験を，

〔に〕孤児院や母親保護シェルターから定期的に刊行されていた報告書の中の臨床記録や母親支援団体作成の生活史の聞き取り結果などを用いて，

丁寧に掲げ上げてくるということをやっている。この試みは，‘歴史の闇’の中に葬りさられてしまっていたかもしれない社会的下層に属する未婚の母たちの社会的・状況的体験のリアルな実態を，その苛酷で悲惨な側面を含めて，読み手である現代のぼくたちの前に蘇らせようとしている，と考えることができる。

3.5. <個別例の位置，意義をどう考えるべきか>：

ミクロの歴史学において提起されている重要な議論の一つに〔d〕<個別事例，もしくは個別事象とそれを超えるものとの関連づけについて，どう考えるべきか>という問題がある。この点については，二宮〔1993〕に重要な指摘が見られるので，まずはその点について簡単な紹介を行なうとともに，<‘個別事象を超えるもの’の把握・認識の際に個別事象をどのように活用するか・活用しないか>という点に注意しながら簡単なコメントを付け加えておくことにする。

二宮〔1993〕において‘個別事象を超えるもの’の候補として挙げられているのは，【一般理論；系（セリー）；文化の構造】の3つである。

一般理論を志向するのは，**グラント・セオリー至上主義派の場合**で，ここでは，《…個別例は，一般理論に従属しており，その自立性を失って》（二宮〔1993：p.2〕）る。言い換えると，一般理論の理屈に適合する限り（あるいは一般理論の射程に収まる範囲内で），その例示的位置づけの下に個別事象は活用されることになる。この場合，<個別事象は一般理論へと解消されていく（あるいは解消されている）>ということができるだろう。別の言い方をすれば，ここではトップ・ダウン型の論理が優先するため，個別事例からの理論構築という発想は，あらかじめ排除されていることになる。

次にここで‘系’と呼んでいるのは，**アナール学派の「系の歴史学」の場合**のことである。この場合には，《…史料を系として構成するためには，個々の事例は均質でなければなら》ず，《…系にとっての「外れもの」は排除されてしま》い，《「数と無名性」が強調され》ることになる。要するに‘系’の論理が作動する結果，‘均質’のゾーンに入っているか否か，‘外れもの’になっていないかどうか，という基準での個別事例の腑わけがなされていく，ということである。その結果，《…ここでもまた，個別例の独自性は，消去されざるをえない》（二宮〔1993：p.2〕）という特徴を持っている。個々の事例の‘均質性’がその「数と無名性」とを保証しているのだから。

3つ目の‘文化の構造’が焦点化されてくるのは，**ギンズブルグのミクロの歴史学の場合とC・ギアツ（Geertz）の解釈人類学の場合**である。

ミクロの歴史学の場合には，これが《…個々の事例のうちに認められる徴候を手がかりにして，そこに固有の文化の構造を読み解く方法…》（二宮〔1993：p.2〕）として位置づけられているので，<個別事象の中の徴候への着目による‘文化の構造’への接続>がなされることになるのである。こ

ここでは、個別事例の中に（研究者の側のテーマとの関連で）‘徴候’的なものを読み取ろうとする発想が優位を占めているので、‘徴候’ゾーンに属するものが見出される限り、個別事例は活用されることになる。

なお、この‘徴候’論については、すぐ後に〈3.6.1.〉でこの‘徴候（=symptom and/or sign）’という発想に類似した‘症状（=symptom）’や‘痕跡（=trace）’などに注目した議論を紹介する形で、より立ち入った説明を行なうことにする。

C・ギアツの解釈人類学の場合には、〈個別事象の「厚い記述」を媒介にして文化的なものへの接続〉がなされていくと言っている。ここでは、個別事象の細かい記述を連ねていく過程で（研究者にとって重要な）‘何か’が浮かび上がってくる可能性が想定されており（しかもその‘何か’を生み出す根拠として‘文化的なもの’の存在が想定されており）、その‘何か’に注目することを通して、個別事象を超えるものへの接続がなされていくことになる。

以上が二宮〔1993〕でなされている議論の要約にぼくかなりのコメントを追加したものだが、ぼくとしては、‘個別事象を超えるもの’の候補の4つ目として、（研究対象として設定している現象についての）モデルを追加しておきたいと思う。つまり、（詳しい議論は別稿に譲ることにせざるをえないが）複数の個別事象、もしくは（より正確に言えば）複数の個別事例の検討を通して、そうしたモデルの構築を行なっていくという路線がありうるという点を指摘しておく。

3.6. 〈ミクロからマクロへ〉と繋げる2系列の議論：

先に〈3.3.〉で紹介・検討したミクロの歴史学における分析の二正面作戦の議論とも関連することだが、ぼくの見るところ、ミクロの歴史学には〈ミクロからマクロへ〉と繋げていく2系列の議論があるように思われる³⁰。一つは、〔い〕〈痕跡＝糸口〉からの探索という方向での議論で、ギンズブルグやM・ペルトーネン（Peltonen）らが主張しているものである。もう一つは、〔ろ〕証拠の蓄積と複数のコンテクストづけを通しての議論で、こちらはR・D・ブラウン（Brown）の主張である。

〔い〕の系列の議論は、マクロ現象に繋げていく際の基本的方向性についてはそれなりのイメージを提示しており、また『チーズとうじ虫——16世紀の一粉挽屋の世界像』等の実際の著作の中では民衆文化の特徴の析出といった形でその成果を出してくるということではできているものの、具体的にどうやって（how）繋げていくのか、繋げていけるのか、という理論的論点については、すぐ後に見ていくように、明示的に答えているとは言い難いように思う。そして実は、この‘どうやって繋げていくのか、繋げていけるのか’という理論的問題について、その空白を実質的に埋めるという重要な貢献をしているのが、ブラウンによる証拠の蓄積と多面的コンテクストづけとをセットにした議論なのである。

以下、こうした位置づけの下にこれら2系列の議論の紹介・説明をしていくことにしよう。

3.6.1. 〈‘痕跡＝糸口’からの探索〉という方向での議論とその特徴：

〔い〕＜‘痕跡（trace）＝糸口（clue）’からの探索＞という方向での議論は〔d〕の主題である＜個別事例、もしくは個別事象とそれを超えるものとの関連づけについて、どう考えるべきか＞という問題についてのミクロの歴史学の観点からの一つの回答と言っているものだが、この議論の紹介に入るためには、まず、複数事象間の関連づけのための2つの視座を区別しておく必要がある。一つは‘原因と結果’との関連づけ、もう一つは、‘部分と全体’との関連づけである（ギンズブルグ〔1986=1988 : p.190〕）³¹。

先ず第1の視座である‘原因と結果’との関連づけの場合について。論理的には、＜原因から結果へ＞と関連づけていくやり方と、＜結果から原因へ＞と関連づけていくやり方が想定できるわけだが、ギンズブルグ〔1986=1988 : p.192〕で注目されているのは、後者、つまり、結果から原因を推論し探り出してくる能力、現在の結果から過去に遡って原因を特定化してくる能力の方である³²。

次は、第2の視座である‘部分と全体’との関連づけの場合である。ここで検討と議論の俎上にのせようとしている＜‘痕跡＝糸口’探索法＞の論理というのは、この第2の視座に関わるものである。

先に〈3.2.〉でミクロの歴史学においては裂け目などに注目が集まる、といった趣旨のことに触れたが、＜‘痕跡＝糸口’からの探索＞という方向での議論の出発点はそうした裂け目などの‘痕跡（trace）’の発見である。つまり、研究者や観察者によって直接体験することが不可能な出来事の‘痕跡’を発見することから調査研究をスタートさせるということである（ギンズブルグ〔1986=1988 : p.190〕）。「部分と全体」との関連づけという議論脈絡で言えば、この‘痕跡’の発見というのは、‘部分’の発見であり、＜ミクロとマクロとの関連づけ＞という議論脈絡では‘ミクロ’の特定化を意味している。

この点を確認した上で、次に＜ミクロからマクロへ＞と繋げていく議論の典型として、ギンズブルグが言うところの‘医学的症候学モデル’があることを指摘しておこう。臨床の現場に携わっている医師が日常的にやっていること、それは、‘患者の示す個別的で表面的な症状（symptoms）’の観察を通して‘直接的観察では接近できない疾患・病気’を探り当てていこうとする営みである。そこでは病気・疾患の診断の論理、医学的症候学モデルの論理が作動しているのである（ギンズブルグ〔1986=1988 : p.188〕）。その論理を確認しておけば、症状という‘見えるもの’を手がかりにして（その‘見えるもの’をその一部として含み持つ）‘見えないもの’＝病気・疾患についての推論を下すという診断の論理——上で触れた‘痕跡’という言葉を用いて言えば、具体的に見て取ることのできる‘痕跡’を糸口にして‘幻の大きな何か’を見つけ出してこようとする、あるいは創り出してこようとする論理——とすることができる³³。

この点についてペルトーネンは次のように述べている。

《ギンズブルグやレヴィが提唱する新しいミクロの歴史学に共通する重要な特徴は、‘糸口〔探索〕法（method of clues）’である。この方法というのは、ピッタリとはしない何か、説明を要する何か一風変わったもの〔を糸口にして、そこ〕から調査研究を開始する〔というやり方〕のこ

とである。この奇妙な出来事もしくは現象は、より大きいが隠されているか知られていない構造の徴候 (a sign) と見なされる》(Peltonen [2001 : p.349])

ここに見られるのは<特定の特異な現象への着目→構造の析出>という流れだが、この議論においては、どのようにして (how) 特定の特異な現象から大きな構造が析出されてくるのか、という点はブラック・ボックスのままである。ぼくは、両者を媒介する‘何か’が必要であり、その位置を埋めるものとして‘何らかのコンテキスト’を想定せざるをえないだろう、と考えている。つまり、特定の現象から大きな構造が析出されてくるためには、最低限、何らかのコンテキストによる両者の関連づけが必要だろう、ということである³⁴。こうして、<特定の特異な現象への着目→何らかのコンテキストによる関連づけ→構造の析出>という分析作業の流れが生み出されてくることになるのである。

それはともかく、ギンズブルグ [1986=1988 : p.194] によると、この症状から疾患への繋げ方という際に重要な位置を占めるのが、詳細な観察と詳細な記録であり、それらの丁寧な作業を通じて個々の疾患の厳密な‘歴史’に迫ることができるのだと言う。

詳細な観察と詳細な記録があれば、なぜそうした‘歴史’に迫れるようになるのだろうか。この重要な論点について知りたいところだが、ギンズブルグ [1986=1988] の該当箇所 (p.194) では³⁵、上記の指摘以上には何も述べられていないのである。この疾患の‘歴史’に迫るという点に関するばくなりの仮説的見解については、次の〈3.6.2.〉での議論の紹介を終えた後に、戻ってことにしたい。

3.6.2. 証拠の蓄積と多元的コンテキストづけを通しての議論とその特徴³⁶ :

先に、ここで主題的に取りあげている<<ミクロからマクロへ>>とどうやって繋げていくか、繋げていけるのか>という理論的問題について [い] <痕跡=糸口>からの探索という方向での議論は肝心のところが曖昧なままに終わっており、その空白を実質的に埋めるという重要な貢献をしているのが、[ろ] 証拠の蓄積と多元的コンテキストづけとをセットにした議論なのであると述べておいた。今度は、<ミクロからマクロへ>と繋げていくこの第2の回路についての議論を見ていくことにしよう。

ここでの議論は、<ミクロからマクロへ>と繋げていく議論はどのようにすればその説得力を高めていくことができるか、という問題意識から展開されているとみなすことができるものである。説得力を高めていく主要なやり方=方略としてブラウンが実質上提起しているのは、‘証拠の蓄積効果’論と‘多元的コンテキストづけ’論である。

‘証拠の蓄積効果’論の出発点には‘証拠 (evidence)’についての議論、より正確に言えば、多様な回路を通して生み出されてくる証拠についての議論がある。この論者によれば、証拠 (evidence) とは心に真実を見抜かせることを可能にさせるものであり、より具体的には、‘感覚による知覚’、‘他者たちによる証言’、‘理性による帰納’という3種類の回路から生み出されてくる証拠 (proof)

を想定することができる、と言う (Brown [2003 : p.5])。この種の証拠が悩ましいのは、そうした証拠が、次のような意味で、常にエラーの可能性を抱え込んでいるという事情があるからである。というのも、ある歴史的出来事を考えてみた場合 (ブラウンはアメリカ合衆国憲法制定会議の例を出してきて論じているが)、それが起こった日時や場所についてなら、仮にみんなが合意できたとしても、問題となる証拠が‘感覚による知覚’であった場合には五感が常に信頼できるとは限らないわけだし、‘他者による証言’の場合には証言にまわりついてくる必然的な主観性の問題を排除できず、‘理性による帰納’の論理を採用したからといって必ずしも一つの‘事実’へと収斂していくとは限らないのだから (Brown [2003 : p.6])。

このように証拠は構造上の難点もしくは欠陥を抱え込んでいるのだが、にもかかわらず、ある種の証拠の場合には証拠が蓄積されてくるということの重みを見落とすことができないとブラウンは主張する。

彼は先ず、われわれが条件付きの真実、部分的ながらも様々な真実からなる世界 (a world of conditional, partial truths) に生きており、しかもその世界を解釈する存在なのだということ、われわれの人生を言わば宿命的に枠づけている基本的条件を確認する。

その上で、そうした世界で生起する出来事の中には、網羅的な形でその記録が残されているものがあるということに注目する。そうした特徴を持った出来事の場合、それらの出来事は、虚構であるとか、実際に起きた可能性が高いがそうとは言い切れないといった水準に属する事柄なのではなく、その出来事が起きたこと自体は明らかに事実なのだということを主張する。この、＜‘その出来事が起きたこと自体は明らかに事実なのだ’ ということについてだけは否定することができない証拠＞を指して、ここで＜‘**事実の核 (the factual core)**’ を備えた証拠＞と呼ぶことにすると、そうした特徴を持った証拠が存在するというところこそが、ブラウンの主張の第1のポイントであり、しかも彼がここで展開している‘証拠の蓄積効果’論が成り立つか否かを占う上でも決定的に重要な‘試金石’である³⁷。

第2のポイントは、彼が言うところの‘真実という主張 (truth claims)’の仕方——つまり、様々な個別具体的な証拠群を束ね上げながら解釈水準で研究者が提示してくる仮説的主張の仕方——に関連している。ミクロの歴史学者たちは、すぐ上で触れた＜‘事実の核’を備えた証拠＞を基盤にして、言わばそれに関連づける形でそれ以外の多様な証拠群の山を集積＝蓄積させてくるのであり、そうした蓄積された証拠群を拠り所にしながらこの主張を行なうのだと彼は言う (Brown [2003 : p.6])³⁸。要するに、ミクロ歴史学的業績の中には、こうした二重の意味で歴史的経験の把握が相当にしっかりとした根拠を持っているものがあって³⁹、そうした業績については、これを虚構だと安易に切り捨てることなどできず、‘主観性’と‘人為性’と‘言語依存性’といった危うさはあるものの‘条件付きの客観性’を備えた業績として評価すべきである、と主張しているのである (Brown [2003 : p.17])。

次は‘多元的コンテクストづけ’論である。先に〈3.6.1.〉で特定の現象と構造の析出とを繋ぐためにはその間に何らかのコンテクストづけによる関連づけが必要なはずだ、と述べておいた。ここで‘多元的コンテクストづけ’と呼んでいるのは、研究対象の焦点として設定される構造の析出

や把握を促進・推進・深化させていく媒介となりうる観点——構造の析出や把握の際に研究者が準拠・動員してくる観点——からのコンテクストづけ＝脈絡作りのことを指す。

ブラウンによれば、例えば、P・C・コーヘン（Cohen）の手になる『ヘレン・ジェウエットの殺人—19世紀ニューヨークにおける一娼婦の生と死』[1998]という著作においては、対象とする殺人事件が起こった空間的・時間的焦点をはっきりとさせた上で、《包括的で多次元的なコンテクストづけが駆使されており、関連コンテクストの徹底的な検討がなされた結果、センセーショナルで扇情的なお話が19世紀の前半におけるジェンダー関係の文化に関する見事なまでに透徹した分析へと変換されている》（Brown [2003 : p.12]）という。コーヘンはこの異常な殺人事件絡みで歴大な証拠群を‘掘り起こしている’らしいのだが、そのやり方は、と言うと、この種の事件の場合通常期待される関連新聞記事——ヴィクトリア朝時代の覗き趣味的観点から提示されてくるこの事件の関連新聞記事——の掘り上げは言うまでもなく、さらに《驚くばかりの広がりや活気に満ち溢れた性的対抗文化、当時隆盛を極めていた慣習的な性的対抗文化を詳細に記録しており》、その結果、《犯罪と裁判絡みの事実群をはるかに超えた水準のものになっており》、こうして《関連する出来事や参加者たちの社会的・文化的コンテクストを提供する》のに成功している、とのことである（Brown [2003 : p.15]）。

以上の議論の延長線上で、ブラウンはさらに‘証拠の蓄積効果’論と‘多元的コンテクストづけ’論とを結合させている。そこで注目されているのは、ミクロの歴史学者たちが駆使する説得の方略であり、過去の出来事の再構成の仕方である。

ミクロの歴史学者たちの説得の方略は、

- ・1 研究課題として設定する主題に限定を加えておいた上で、
- ・2 これを網羅的に（ただし最後決定的にではなく）探求⁴⁰し、そのことを通して、
- ・3 その限定された主題に関する証拠の支配権を握ることを試み、そして
- ・4 そのトピックの範囲内では、読み手からの圧倒的な権威と信頼とを勝ち得、
- ・5 この権威と信頼の立場から、より広範な解釈的見解の提示と主張を行なう、

というものである（Brown [2003 : p.16]）。

他方、過去の出来事の再構成の仕方について言えば、ミクロの歴史学において特徴的なのは、広範囲のデータ源の探求と関連づけを通してそれがなされることであり、しかも3次元のコンテクストを備えた分析的物語として——つまり、抽象的諸力と生身の人々という、出来事を形づくる二つの契機を駆使して描き出される分析的物語として——産出されることである（Brown [2003 : p.18]）。

以上が、証拠の蓄積と多元的コンテクストづけを通しての議論の概要である。

3.6.3. <症状から疾患への繋げ方>についての仮説的見解：

この第2系列の議論や発想を踏まえて、最後に、<3.6.1.>で曖昧なままでやり残しておいた<症状から疾患への繋げ方>についての議論を詰める作業をやることにしよう。

先に<詳細な観察と詳細な記録があれば、個々の疾患の厳密な‘歴史’に迫ることができる>と

ギンズブルグは主張していたわけだが、すぐ上で見た証拠の蓄積と多元的コンテクストづけを通しての議論の発想を踏まえることによって、なぜそうしたことが可能なのか、という点に迫ることができるように思う。この点に関するかなりの仮説的見解を述べてみれば、次のようになる。

まず詳細な観察とその記録が蓄積されてくると、結果的に、特定の症状から特定の疾患へと繋がっていく複数の回路に関するデータベースができてくる、という具合に考えることができるだろう。このデータベースには、

- ・1 症状のプロフィール；
- ・2a 症状と疾患とのセット（＝結びつき方）の具体的事例；
- ・2b 〈・2a〉の類似事例か〈・2a〉と同じゾーンに入る事例；
- ・2c （逆に〈・2a〉の）対照事例；
- ・3a 症状と疾患とのセットの典型事例、周辺事例、逸脱事例等；
- ・3b それらの諸事例の輪郭や諸事例が生み出される回路、諸事例が描き出す軌跡など；
- ・4a 症状と疾患とのセットの諸類型析出の際の軸候補；
- ・4b 〈・4a〉の軸候補に由来する）症状と疾患とのセットの諸類型；

など——‘証拠の蓄積’論の観点からすると、言わば分節化された証拠群に当たるもの——が入れ込まれてくると見ていいだろう。個々の疾患の‘歴史’に迫れるようになるとすれば、それは、医師がその都度その都度の症状との出会いの場での経験を積んでいくにつれて、これらのデータベース情報の総体（＝シグマ〔Σ〕）がケース・バイ・ケースに対応できる特質を備え持った有機的な背景的知識として蓄積・動員されてくる仕組みが——つまりは、‘多元的コンテクスト’の実質的内容に相当するものが——定着していくようになり、こうしてデータベース情報総体との関連で個々の疾患の‘歴史’が位置づいてくるからではないか、という仮説的アイディアである⁴¹。

4. 生活史研究とミクロの歴史学との位置関係について：

以上〈2.〉と〈3.〉のセクションで、ミクロの歴史学の諸特徴や、ミクロの歴史学的営みの中でよくとしてはどういったところに注目しているのかを押さえたわけだが、そうした検討を踏まえて、次の〈5.〉では、〈生活史研究に対してミクロの歴史学からどういった具体的示唆があったのか〉について、私見を提示＝確認することにしたいが、その点に言及する前に、ここでは、生活史研究の分野のうちミクロの歴史学の議論や成果が貢献できそうなサブ・ジャンルがどういったところにあるのか、という点について見通しをつけることを行なっておきたい。

見通しをつけるにあたってよくが必要と考えている認識枠組みは次の2つである。一つは多様な生活史研究を俯瞰するための簡単な整理枠組みであり、もう一つは‘個人史’情報組み込みのヴァリエーションである。

第1の多様な生活史研究を俯瞰するための簡単な整理枠組みというのは、〈生活史の‘何’に焦点化するか〉という観点からのもので、より具体的には、次のような形で二つの軸を設定し、その

各々を3分節化した上で、これをかけ合わせて析出してきたものである。

一つの軸は、‘**ヒストリー**’の契機と‘**ストーリー**’の契機という、生活史の、とりわけ‘歴史＝ヒストリー’を構成する二重の契機に着目したもので、この両者を組み合わせて3分節化すると、＜ヒストリーへの焦点化＞、＜ストーリーへの焦点化＞、＜ヒストリー/ストーリーへの二重焦点化＞の3つになる。

もう一つの軸は、生活史の、とりわけ‘生活＝ライフ’の焦点の設定の仕方に着目したもので、ここでは、焦点を‘**個人的なもの (the personal)**’に置くか、それとも‘**社会的なもの (the social)**’⁴²に置くか、という2種類の焦点化の仕方を設定する。その上で、この両者を組み合わせて、これまた3分節化すると、＜焦点としての個人的なもの＞、＜焦点としての社会的なもの＞、＜二重焦点としての個人的なもの/社会的なもの＞の3つを区別することができる。

この2つの軸をかけ合わせると、次のような形の9つのサブ・ジャンルを区別することができることになる。すなわち、

- ・1 個人的なものの歴史 (personal history) ;
- ・2 個人的なものの物語 (personal story) ;
- ・3 個人的なものの歴史と物語 (personal history/story) ;
- ・4 社会的なものの歴史 (social history) ;
- ・5 社会的なものの物語 (social story) ;
- ・6 社会的なものの歴史と物語 (social history/story) ;
- ・7 個人的なものと社会的なものの歴史 (personal/social history) ;
- ・8 個人的なものと社会的なものの物語 (personal/social story) ;
- ・9 個人的なものと社会的なものの歴史と物語 (personal/social history/story) ;

の9つである。

これら9つのサブ・ジャンルのうち、無理のない形で生活史研究と見なせるのは、

- ・1 ＜個人的なものの歴史 (personal history) : (→**個人の生活史**)＞ ;
- ・2 ＜《個人的なものの物語 (personal story) ; (→**個人のライフ・ストーリー**)＞ ;
- ・3 ＜個人的なものの歴史と物語 (personal history/story) ; (→**個人の生活史とライフ・ストーリーとのミックス**)＞ ;
- ・7 ＜個人的なものと社会的なものの歴史 (personal/social history) : (→**プロソボグラフィ**)＞ ;
- ・8 ＜個人的なものと社会的なものの物語 (personal/social story) : (→**集団成員のライフ・ストーリー**)＞ ;
- ・9 ＜個人的なものと社会的なものの歴史と物語 (personal/social history/story) : (→**集団成員の生活史とライフ・ストーリーのミックス**)＞ ;

の6つで、各サブ・ジャンルの生活史研究上の特徴をイメージしてもらうために、(上記の‘個人的なものの歴史’の横に書いてある‘**個人の生活史**’のような形で) 太字で総括的な名称を入れ込んでおいた。

この‘認知地図’を手がかりにした場合、ミクロの歴史学の議論はどのあたりに位置しているこ

とになると言えるのだろうか。ミクロの歴史学においては、‘分析の2 正面作戦’のセクションで紹介したく‘生きられた体験’と‘不可視の構造’への眼差しとか、くミクロからマクロへくと繋げる2 系列の議論などからも明らかなように、一番自然な形で位置づけるのは、‘個人的なもの’と社会的なもの’に焦点化した3つのサブ・ジャンルのうち‘生きられた体験’の契機を組み込んでいるく・8くとく・9くの2つであり、ミクロの歴史学のうち‘不可視の構造’や‘マクロ的なもの’を背景情動的な位置づけとして持った諸業績を考えれば、‘個人’そのものに焦点化した3つのサブ・ジャンルの中のく・2くとく・3くも射程に入ってくる、ということになるだろう。

二つ目の認識枠組みはく‘個人史’情報組み込みのヴァリエーションくである⁴³。こちらは、ぼくが個人的に強い関心を寄せている‘個人史’情報を使ってなされる研究にあらかじめ絞り込んだ上で、そうした研究についてどういうヴァリエーションを設定するか・設定できるかという点を浮き彫りにしたものであるが、大きくは、次の4つのサブ・タイプを区別することができるだろう。

第1は、‘個人史’グループとでも呼べるものである(→‘個人史1’)。この場合、研究者の関心は‘個人史’そのものに焦点化されていて、【個人史；個人生活史；自分史；自伝；伝記；評伝】などがこのサブ・タイプの主要なものである。その他には、‘対’となる人物たちを対象とした‘個人史’研究⁴⁴も、ここに含まれる。

第2は、‘個人史の側面X’グループである(→‘個人史2’)。ここでは、‘個人史’のある側面・ある時代に焦点化がなされている⁴⁵。

この第1と第2のサブ・タイプは、研究対象とする個人に興味の関心が集中しているという点では共通している。

第3は、‘個人史とそのY’グループと呼ぶことにする(→‘個人史’+ α (その1))。この場合、研究者の関心は、対象者の‘個人史’と共に、その人物と関連がある(か、関連を持たせたい)側面(それをここでは‘Y’と名付けているのだが)の双方に向けられている。このサブ・タイプには【個人とその時代；個人とその社会；個人とその文化】などを想定することができる⁴⁶。

第4は、‘Zの伝記’グループとでも呼ぶことができるだろう(→‘個人史’+ α (その2))。ここでは‘個人史’にもスポットが当てられるけれども、研究者の第一次的な関心は、あくまでそれとは違った点(ここでは‘Z’と呼んでいる)の方にこそ向けられている。(個人史を用いてなされる)【集団の伝記；社会の伝記；階級文化の伝記；文化の伝記；思想の伝記】等が、このサブ・タイプである⁴⁷。

このく‘個人史’情報組み込みのヴァリエーションくの認識枠組みを用いて言えば、ミクロの歴史学で主題化されてくるものは、傾向的にはく‘個人史’+ α くの2つのサブ・タイプに属する業績になると考えることができるだろう。

5. 終わりに：ミクロの歴史学からの示唆；

ぼくは、自分自身の‘研究展開の方向づけ’関連では、‘個人史’焦点化路線のさらなる検討・

探求・実験の試みと**複数の生活史事例の活用路線**の模索と具体例の検討をしていきたいと考えているのだが、そうした研究方向を推し進めていくこととの関連で、また、これまでの議論検討を総括する意味も込めて、最後に、ミクロの歴史学からの示唆を再確認しておくことにする。大きく次の4点を指摘することができる。

第1は、**‘実験的’発想・志向で研究に取り組んでいくことの大切さ**である。これは、研究者の視点・着目点の重要さとも関連することだが、今回、ミクロの歴史学の分野に関連した議論や展望論文、さらには諸業績を垣間見た中で今更ながら思い知らされたことである。研究を前進させるための多様な**‘実験的試み’**に挑戦してみようという研究上の基本姿勢には大いに共感している。

第2は、**‘個性化的認識 (individualizing knowledge+individualizing perspective)’ 論の発想とその含意とを高く評価したい**ということである。この認識論は**‘個人史’ 焦点化路線**と共鳴・共振すると共に、この路線の**‘正当化’**の議論の一環として位置づけることができるものである。また、〈3.4.〉でも触れたように、この発想が**‘具体的なものの知’**への志向性を強く持っている点も忘れるべきではないだろう。

第3は、**‘エミック’の契機と‘エティック’の契機との両睨みの観点**である。＜対象者に寄り添いながら距離を取る＞という方法的スタンスの大切さと言ってもいい。さらに、**‘エミック’の契機に軸足を置いた研究スタイルは、＜対象そのものの把握＞と親和的であり、‘エティック’の契機に軸足を置いた研究スタイルは＜対象を通しての把握＞と親和的**と言っていいと思う³⁴が、この＜対象そのものの把握＞と＜対象を通しての把握＞との両睨みという発想も重要なものと考えている。これらの観点や方法的スタンス、発想は、（＜1. はじめに＞で提示しておいた＜生活史研究生成/産出の基本イメージ＞で用いた用語で言えば）（1a）生活史素材の活用可能性を検討する上でも、（1b）研究者の**‘眼差し’**や**‘視座’**を考える上でも、さらにまた（2a）素材群と研究者の視座との相互作用の過程（interactional processes）や（2b）データ群の選択・絞り込み、（3）データ群とのさらなる格闘の各局面でも、大切なもののように思われる。

最後に第4は、**＜ミクロとマクロとの関連づけ＞をどのように行なうか、という問題群への理論上の貢献**である。**‘エミック’**と**‘エティック’**の用語を用いて言えば、エティックの論理を活用・発揮することの意義として、この＜ミクロとマクロとの関連づけ＞という問題群はあるわけだが、〈3.6.〉である程度の詳しさを紹介・検討したように、とりわけ＜ミクロからマクロへ＞と繋げていく2系列の議論——つまり、＜**痕跡＝糸口**＞からの探索の議論と証拠の蓄積と複数のコンテクストづけを通しての議論——は示唆に富む。これらの議論は、エティックの論理の発動場面の一つ、しかも重要な議論の一つと言っていいものである。

ここで、研究対象に接近していく際に、

〔い〕その研究対象の一部を構成する個々の素材候補群の個別的検討から分析作業を開始し、

〔ろ〕それらの素材候補群の一つ一つと丁寧につきあいながら、言わば**‘ボトム・アップ’**的な蓄積効果が生み出してくるはずのその都度の研究成果を重視しつつ、

〔は〕それらの成果を睨みながら、**アブダクション**の論理を駆使する可能性をも視野に入れ込ん

で⁴⁹、それらの成果を包括的に把握/説明可能な何らかの理論枠組（＝解釈枠組）を編み出している
 くか、‘セレンディピティ’的に捻り出す（この〔は〕局面を指して、 $\langle +\alpha \rangle$ と呼んでいる）
 という3重の基本的特徴を備えた方法論上の立場を、ぼくは総括的に**＜ボトム・アップ+ $\alpha⁵⁰と呼んで、ぼく自身が拠って立つ分析方法上の基本姿勢を言い表わすことにしているのだが、
 この言い回しを用いて言えば、＜痕跡＝糸口＞からの探索の議論こそは、＜ボトム・アップ+ $\alpha
 の路線の1具体例と位置づけることができるものであり、また証拠の蓄積と複数のコンテクストづ
 けを通しての議論の方は、＜ボトム・アップ+ $\alpha
 に提起したものとなすことができる。$$$**

¹ 第109回生活史研究会例会（日時：2010年6月26日（土）午後2～6時；場所：大正大学〔巢鴨校舎〕10号館2階1022教室）の場で＜生活史研究の課題を考える＞という特別企画が催された。その発案者は、研究会事務局の高橋正樹氏である。その時の発表者は二人だったが、そのうちの一人として、当日このテーマについての問題提起を行なった（もう一人の発表者は江頭説子氏〔法政大学大原社会問題研究所〕である）。本稿は、その時の発表レジュメのうち、（ぼくの興味関心からするとより重要という意味で）その主要部分を占めていた‘ミクロの歴史学からの示唆’を検討・紹介した箇所を中心にして、その内容をさらに膨らませる形で文章化したものである。当日のレジュメには、もう一つ、当日の企画テーマにより直接的に応じる形で準備したセクションがあったが、こちらの主要部分については、参考までに注4に入れ込んである。

なお、例会テーマ自体の総括的な紹介・位置づけなどについては、企画者である高橋氏が後日の会報でかなり丁寧かつ示唆に富む文章を発表されている（高橋〔2010〕）ので、そちらを参照されたい。

² 【 】, ‘ ’, < >, 《 》など、本稿で用いているいくつかの記号について、その用い方の意味を説明しておくことにしよう。

- ・1 【 】: 対象とする事項（本文の場合で言えば、‘生活史研究の課題’）について、その分節化を行なう際にこの【 】で囲む形で示してある。
- ・2a ‘ ’: 書き手の観点から見て注目に値するもののうち、相対的に短い用語や言い回しについては、読み手の注意を喚起しておきたいので、これを‘ ’で囲んである。
- ・2b < >: 書き手の観点から見て注目に値するもののうち、相対的に長い語句や言い回し、時には一文になることもあるが、これらについては< >で囲んである。
- ・3 《 》: 引用内容は、この《 》で括ってある。

³ 本文で触れた各項目について簡単なコメントをしておくと次のようになる。

- ・1 <生活史研究でできること（もしくは、できないこと）>を考える：この関連では、生活史研究の‘特質’の検討が必要になるはずである。その場合、生活史研究の範囲の設定（＝境界設定〔boundary setting〕）と生活史研究の‘特質’‘特性’の検討とか、生活史研究の特質と生活史素材のそれとの間の共通点や相違点の比較検討といったことを議論の俎上に載せることができるだろう。
- ・2 <生活史研究はどういうことをやってきているか>を考える：これまでの生活史研究の諸業績を振り返りながら、それら各々の貢献度について批判的に検討を加えることが中心的作業である。やるとなると、本格的に取り組まなくてはならなくなるので、本稿では意識的に外している（注4も参照されたい）。
- ・3 <生活史研究にはということが期待されているのか>を考える：ここでは、‘誰’が期待するの

か、の分節化が必要かもしれない。この議論の検討の際には、最低限、‘(生活史研究の対象者に) 寄り添う’ 基本姿勢が大切ではないかと考えている。

- ・4 <生活史研究でどういうことをやりたいか>を考える：研究者の側の研究上の‘思い入れ’や‘問題関心’を対象化する作業とも関連したものである。
- ・5 <生活史研究はどういうことをやるべきか>を考える：すぐ上の・4ともダブる側面が出てくるが、生活史研究に取り組む研究者の側の‘価値’の問題、‘使命’の問題が絡んでくるはずである。
- ・6 <生活史研究でやってもいいこと>と<生活史研究でやれるかもしれないこと>を考える：本稿でやるような作業を通して、これまでの生活史研究という形ではやってはいないけれども、やってもいいのではないかというゾーン、もしくは、やれるかもしれないというゾーンに属する課題群を、思考実験的に、あるいは近接する研究分野の諸業績の批判的検討などを通して、提示することができるだろう。

⁴ ばく個人にとっての生活史研究の課題としては、‘**個人史**’ **焦点化路線**のさらなる検討・探求・実験の試みと**複数の生活史事例の活用路線**の模索と具体例の検討の2つが大切なのではないかと考えているのだが、そうした個人的興味関心を離れて、より広く生活史研究の分野全体の水準で生活史研究の‘課題’について考えをめぐらす場合には視野に入れておいた方がいいのではないかと考えていることを2点ほど指摘しておきたい。一つは (A) <生活史研究として何がやれるのか>の候補群、もう一つは (B) <‘面白そうな’生活史研究を見つけ出してくる際の着目点>である。

先ず (A) <生活史研究として何がやれるのか>の候補群を総花的に挙げてみると次のようなことを考えることができるように思う。

- ・1a ‘個人史’グループ：‘個人’の‘生活世界’‘意味世界’‘社会的世界’の歴史を浮かび上がらせること；
- ・1b ‘個人史の側面X’グループ：‘個人史’のある側面・ある時代を浮かび上がらせること；
- ・1c ‘個人史とそのY’グループ：‘個人史’とそのYの双方を浮かび上がらせること。あるいは、個々人が生きた‘時代’‘社会’‘文化’などを浮かび上がらせること；
- ・1d ‘Zの伝記’グループ：個人史を組み込む形で、Zを浮かび上がらせること。あるいは、個々人が属する‘社会集団’‘社会的カテゴリー’‘社会的世界’‘世代’などを浮かび上がらせること；
- ・2 クロノロジカルな並べ方の活用：プロソポグラフィの作成；
- ・3 象徴的人生体験のエピソード群の主題化；
- ・4a 物語論的議論（‘ライフ・ストーリー’的視座）の採用；
- ・4b ディスココース的議論の採用；
- ・5 ‘ライフ・ヒストリー’と‘ヒストリー’との連続面/断絶面への着目；
- ・6 複数の生活史の重ね合わせ；
- ・7 （‘生活史’や‘生活史素材’を聞き出してくる）インタビュー場面の特質や諸契機への注目と主題化；
- ・8 <話し手と聞き手>との関係の質自体の主題化；
- ・9a ‘生活史素材’そのものの主題化；
- ・9b ‘生活史素材’が生み出されてくる局面への注目と主題化；
- ・9c ‘生活史データ’への変換過程の主題化；
- ・9d ‘生活史研究’としてのプレゼン＝提示の仕方の主題化；

次は (B) <‘面白そうな’生活史研究を見つけ出してくる際の着目点>で、大きくは次の3点である。

第1は‘**方法上の革新**’的**アイディア**である。生活史研究の分野から生み出されてきたものとしては、

すでに【‘羅生門’的手法の提起；‘口述の生活史’の提言；‘雪だるま’式調査の提言；‘物語析出タイプのインタビュー（narrative interview）’の手法の提言；世代間生活史法；ライフストーリー・インタビュー】等があるが、これらの‘方法上の革新’的アイディアは、次のように分節化できるかもしれない。

第1グループは、単一事例水準（もしくは生活史研究一般水準）での‘革新’と見なせるもので、

- ・1a <オーラルなものへの着目>（‘口述の生活史’の提言〔中野卓；敬称略。以下、同じ〕）；
- ・1b <インタビューの仕方と分析等の提言>（‘narrative interview’の手法の提言〔F・シュッツェ（Schuetze）〕；対話的構築主義〔桜井厚〕、など）；

を区別することができる。

第2グループは、複数事例水準での‘革新’である。こちらは、

- ・2a <‘複数事例の重ね合わせ’の工夫の仕方1>（‘羅生門’的手法の提起〔O・ルイス（Lewis）〕＝同一事象への異なる眼差しを並列させる。‘並列’効果の活用）；
- ・2b <‘複数事例の重ね合わせ’の工夫の仕方2>（‘雪だるま’式調査の提言〔D・ベルトー（Bertaux）〕＝複数事例から共通項を浮き彫りにしてくるやり方）；
- ・2c <‘世代の違い’への着目>（世代間生活史法〔谷富夫〕）；

という具合になる。

第2は‘研究展開の方向づけ’的アイディアである。ここで‘研究展開の方向づけ’的アイディアと言っているのは、生活史研究の概念化・（展開上の）理屈づけの観点から見て実質的貢献をしているように思われるか、研究者たちに、この方向でやっていくのが‘面白いのではないかと、問題提起をする際のレトリック（＝‘問題提起的レトリック’）のことである。研究分野を牽引していくだけの魅力を備えたアイディアの場合には、うまくすると、ある時期かなりの研究者を惹きつけ研究者を鼓舞する効果（‘そうか、〔研究テーマとして〕Xってことを焦点にすることができるんだ!!’）と思えてきて元気になっていく、夢を与えてくれる、という効果がある。他方、下手をすると、‘花火の打ち上げ’だけに終わってしまう危険性も秘めている。そうしたアイディアの具体例としては、【‘第一級の社会学的史料としての生活史素材’という位置づけ（W・I・トーマス（Thomas））；‘個人の社会学的研究’という発想（中野卓）；個人の‘自律化’要件の探求（桜井厚）；‘フィールドとしての個人’という着想の提起・再確認（佐藤健二）；‘ライフ・ストーリー’論的視座の提起（やまだようこ）；エスノ社会学的パースペクティブの提起（D・ベルトー）】などを挙げることができる。

第3は‘画期的作品’そのものである。生活史素材を駆使した‘作品’‘読み物’としての内実のある業績のことである。その具体例としては【『ポーランド農民』；『サンチェスの子供たち』；『口述の生活史』；『世界の悲惨』】などがある。ミクロの歴史学の分野での代表的業績の一つである『チーズとうじ虫』も、ここに入る。

以上3点は、<生活史研究は、すでにどういった成果を生み出しているのか>という点を検討・評価していく際に、言わばその‘たたき台’としてぼくが暫定的に採用しようと考えているものである。言い換えると、（当面ぼく自身は行なうつもりはないけれども）仮に生活史研究の分野での‘先行実績・業績’の洗い出しと評価の作業を本格的に行なうという場合には、（生活史研究会のメンバーの業績群や《宗教と社会》の分野で活躍している諸氏の諸業績などを含めて）その存在について気づいていながら立ち入った検討を行なっていない膨大な著作群を対象にした形での、根気のいる‘地道な’作業が待ち受けているということでもある。

なお、生活史研究への導入的性格も備えた基本的テキスト群の系譜については有末〔2010〕を、また（この分野に関わる多様な作品群についての見通しも含めて）生活史研究関連のより包括的な基本情報の紹介については小林〔2010〕を、参照されたい。

ばく自身としては、1986年に「生活史研究とその多様な展開」(→水野〔1986〕)を発表して以降、生活史研究に取り組む際の基本的発想や姿勢は変わっていないと考えている。しかしながら、1990年代に自分なりのデータ分析の手法である事例媒介的アプローチ (Case Mediated Approach; データ分析場面で具体的・実践的に活用する技法的側面を強調する場合には、‘CM法’と呼びならわすことにしている)を開発して以来(水野〔2000〕)、研究を進める際にもっと方法的に自覚的になっているという事情もあって、生活史研究を考えるにあたっても、いくつかの点で微妙な影響が出てきている可能性がある。そこで、ここでは、次の2点に絞ってばく自身の1986年論文での用語法などとの相違点を振り返る形で、現在時点でのばく自身の‘生活史研究’観の特徴を浮かび上がらせておくことにしたい。

一つは、‘ライフ・ヒストリー’と‘ライフ・ストーリー’の意味づけの仕方の違いであり、もう一つは、1986年論文で提示した〈社会的カテゴリー (もしくは属性) のはりついた個人〉という定式化に関連することである。

まず第1点から。両者の差異が際立っているのは、‘ライフ・ヒストリー’と‘ライフ・ストーリー’の意味づけの仕方の違いである。1986年論文では、個人生活史的脈絡との関連があるものを‘ライフ・ヒストリー’と呼び、そうでないものを‘ライフ・ストーリー’と呼ぶ、という言い方をしている(→《…対象者の個人生活史…的脈絡にとって意味があることが、あるいは個人生活史的脈絡を浮かびあがらせていくうえで参考になることが明白な場合、これをライフ・ヒストリーとよぼう。これに対して、そうした点が必ずしも明白とはいえない場合にはライフ・ストーリーとよぶことにする》(水野〔1986: p.159〕))が、現在のばくは、そういう形での対比的用い方はあまり意識していない。

また、現在では‘物語論’的観点からの位置づけを重視しているのに対して、1986年論文執筆当時は——物語論的発想の大切さを予感させるくだりはある(→p.207の補注〔10〕では、《生活史を物語る(narrate)ことにまつわる問題は、じっくりと正面から取りくんでみなければならない内容を持っているように思われる》と述べているし、1994年刊行の科研費研究成果報告書(水野〔1994〕)などに見られるように、後になると個人的に‘物語’論的研究系譜への目配りは見られるのだが)ものの——‘物語’論的視座からの取り組みの意識は、総体的に弱かったことが見て取れると言っていいたいだろう。そのことは、1986年論文の末尾で挙げている《ライフ・ヒストリーへの視座を豊かなものにするための作業》(p.194)の中には、‘物語’論への言及が見られない、という点に象徴的に現われている。要するに‘ライフ・ストーリー’へのまなざしが異なるということである。

第2点は、〈社会的カテゴリー (もしくは属性) のはりついた個人〉という定式化関連での認識の仕方の違いである。

基本的に言って1986年論文での議論の仕方は今も変わらないと言っていいものののだが、そうした中で、1点のみ引っかかるころがあった。それは、このセクションの末尾で、〈社会的カテゴリー (もしくは属性) と個人との関連〉の把握の仕方について述べた次のくだりである。そこでは、〈複数の社会的カテゴリーの‘統合主体’としての個人〉という位置づけがなされているのだが(→《…さらに個人はそうした複数の社会的カテゴリー (もしくは属性) 総体を、その個人なりに独自なかたちで統合する主体として存在している》(p.189))、現時点ならもう少しニュアンスのある議論をすることになるはずである。例えば、現在書くとすれば、‘統合主体’となりえないケース、複数の社会的カテゴリーの相互交差的圧力・影響によって‘引き裂かれ’たり‘圧倒されて’しまっているケースなどをも視野の内に組み込んだ書き方することは確実だからである。

⁵ Berkun〔2007〕は、イノベーション論の要点について簡潔な見通しを与えてくれる好著なのだが、その中には《イノベーションを成し遂げた人々の70%以上が、‘自分が最良のアイディアを勝ち得たのは、自分の専門ではない分野を探究することによってだった’と信じていた》(p.89)と、他分野からの視点や知見の吸収がイノベーションへの刺激になる可能性が指摘されている。

⁶ 本文では‘serendipity’について‘幸運な偶然的出会いと意味の発見’という説明を付しておいたが、これは、いわゆる‘セレンディピティ’現象においては、‘普通ではない(=abnormal)’事象に出くわした時にその事象のありうる意味を読み解き発見することができるかどうかこそが一番のポイントだからである。この点について、Berkun [2007 : p.134] では《イノベーションの際にセレンディピティが際立った役割を果たすのは確かであるが、大切なのは偶然の発見それ自体ではなく、偶然の出会いの場でその出会った人が何をやるかなのである》と述べられている。偶然の出会いをモノにできるかどうか、こそが問われているのである。

なお、この用語の(由来や普及諸形態、諸特質、社会史などの)多様な諸側面を鮮やかに浮き彫りにしている本格的な‘セレンディピティ’論については、Merton and Barber [2004] を参照されたい。この著作は、1950年代末に一旦は出版の直前まで出来上がっていたにもかかわらず意識的に発表が控えられ、そして45年後に出版の運びになった珍しい書物なのだが、その間の入り組んだ事情については、その‘序文’と‘後記’に詳しく述べられている。

この著作は社会学的にも重要なもので、Zuckerman [2010] やCamic [2010] によって、‘社会学的意味論(sociological semantics)’という、後期マートンの事実上の調査研究プログラムを体現する経験的事例研究の第1弾としての位置づけがなされているものである。

⁷ ‘生活史素材’の暫定的定義を示しておく。‘生活史素材’とは、研究者に何らかの意味で研究対象としたいと思わせるだけの〔い〕興味関心をそそる人物がいて、その人物が生きてきた〔ろ〕人生=生活のありよう(もしくは、そのある側面)を照らし出す可能性を予感させる情報内容を含みこんだ個別具体的なもので、〔は〕研究者の視点次第では、〔に〕生活史データになりうるだけの内実を備えたもののことで、‘生活史データ’との関連では‘生活史データ候補’と言い換えることができる。Susan E. Chase [2005] が‘biographical particular’(p.651)と呼んでいるものや、いわゆる‘身の上話の元になるエピソード’も、これに含まれる。また、ターゲットとなる人物以外から得られたその本人に関する情報なども、ここで言う‘生活史素材’には含まれることになる。

なお、本稿で‘生活史素材’と呼んでいる対象は、1986年論文では‘生活史資料’と表現していたものである。両者が指し示す内容自体は実質上同じと見ていいものだが、最近ではもっぱら‘素材’という言い回しを使うことにしている。本人的にはあまり意識してこなかったけれども、ここで、なぜ‘資料’から‘素材’へと言い回しを変えたのか、と考えてみると、‘生活史素材’と言う場合は‘料理’の比喻を用いており、言わば‘調理’の過程で‘素材(=パスタ)’が‘料理作品(=ペペロンチーノ)’へと変換=変貌を遂げていくものだ、という認識——つまりは素材レベルから研究成果レベルへの‘変質’=質的变化の側面をもっと強調しておきたいというべく自身の(研究上の)思い入れ方の微妙なシフト——が背後にあるように思う。また歴史学的発想から‘資料’批判とは言えるが、‘素材’批判という言い方は(言えなくはないかもしれないが)なじまないだろう。ただし、こう書いたからと言って、素材の位置価などについて批判的検討作業を行なう必要がないとかそうしたことに関心がない、という意味ではない。

⁸ 本稿では以下においてミクロの歴史学の議論に絞ってその研究成果などの紹介・検討を行なうことにするが、近接する研究分野での主要な議論群としてぼくが気になっているものとしては、その他に、‘事例研究’論、‘オーラル・ヒストリー’論、‘物語’論、‘レトリック’論、‘自伝的記憶研究’などがある。

⁹ ギンズブルグやレヴィなどに代表されるイタリア学派の影響が大きいこともあって、本稿で主題的に取りあげる‘ミクロの歴史学’は、通常、‘ミクロストーリー’‘ミクロストリア’‘ミクロ・ストリア’などと呼び慣わされているものだが、本稿では、‘ミクロの歴史学(microhistory)’と呼ぶことにしたい(ただし、訳文の中に‘microstoria’と出てくる場合は、そのまま‘ミクロストリア’と表記している場合がある)。これには、この分野の傾向や諸特徴を把握する際にぼくが主として参考にしたものが英語文献であったことが関連している。もちろん、英語の発音の仕方を生かすとするれば、‘ミクロ’ではなく

‘マイクロ’の方がよりふさわしいのは承知しているが、‘マイクロ’という言い回しは馴染みが薄いので、日本語としての‘語呂’の響きを尊重して‘ミクロ’にしてある。また‘ミクロの社会学’もしくは‘ミクロ社会学’という言い回しも意識している。

ここであらかじめこのセクションで取り上げる対象文献の特性について触れておくと、それらは基本的にミクロの歴史学の概要や主要な特徴について紹介・検討した展望論文的性格の強い著作群である。言い換えると、本稿は、膨大に存在するミクロの歴史学の個別の諸業績（その片鱗はMicrohistory Networkというサイト（WWW.MICROHISTORY.EU）の「精選文献一覧（a select bibliography）」セクションに挙げられている文献類からも窺い知ることができる）に立ち入って検討を加えたものではない、という限界を持っている点をお断りしておく。

なお、本稿作成に向けての基礎作業とその諸成果（ぼくとしては、【3. ; 4. ; 5.】の3セクションを念頭に置いているが）を受ける形で、後日、本稿の続編に取り組む予定である。そこでは、一方で個別の諸業績のうち‘個人史’焦点化路線との関連で注目に値すると判断されるいくつかの著作（これらにはギンズブルグ〔1976=1984〕やデーヴィス〔1995=2001〕、Spence〔1978〕、Brown〔1986〕、Cohen〔1998〕、コルバン〔1998=1999〕などを含めたい）の踏み込んだ形での検討が、他方では、〈3.〉や〈4.〉のセクションで論じることになるいくつかの理論的論点に関するぼく自身の仮説的見解の妥当性の再検討と、とりわけ（後述の注30で）〈ミクロとマクロとの関連づけ〉に関する3種類の議論として定式化しているもののさらなる展開と深化が、目指されることになるはずである。

¹⁰ 日本の歴史学界において‘ミクロの歴史学’がどういった取り扱いをされておりどういう位置づけをされているのか、を知りたくて、念のための作業のつもりで全部で16巻（本体部分全15巻プラス総索引の別巻からなるもので、各巻の頁数は最小で〔第14巻 歴史家とその作品〕の714頁、最大で〔第1巻 交換と消費〕の995頁までの範囲であり、平均で792.5頁）からなる大部の『歴史学事典』の索引に目を通してみた（ちなみに、本事典は、編集委員を代表して『歴史学事典〔別巻 総索引〕』の「はじめに」を執筆している樺山紘一氏の言を借りれば、2005年の国際歴史学会議シドニー大会分科会「歴史学辞典のありかた」での報告の場で『事典としての構想と規模においては、まさしく驚異的であるとの評価を授かった』（樺山他編〔2009：p.3〕）とされるものである）。その結果は‘哑然’とさせられるものであった。というも、

〔い〕 ぼくとしては当然掲載されていると思っていた‘microstoria’や‘microhistory’は索引にさえ載っておらず、

〔ろ〕 ‘ミクロストリア’と‘ミクロヒストリー’は、かろうじて——つまり、前者が4個所、後者が1個所——索引に見られはするものの、しかし（説明の際の最小項目単位である）‘和文事項’名にはなっていないのであり、

〔は〕 それなりに有名なはずの‘C・ギンズブルグ（Ginzburg）’は、索引には全部で15回とかなりの個所で登場するが、‘事項’名としては立っておらず、7個所で登場するN・デーヴィス（Davis）のみが‘事項’名として取り上げられていたにすぎない状態だった、

からである。どうやらミクロの歴史学というものは、日本の歴史学界においてはその存在さえもほとんど認知されていないということらしい。

なぜそうした‘超マイナー’な対象を取り上げるのかという点については、本稿プラス（こちらが予定している）続編での検討内容とその意義づけを通して、ぼくなりの答を提示することになるが、それにしても、‘microstoria’もしくは‘microhistory’という項目が、‘歴史学事典’と銘打った著作、しかも（本体部分で言えば）全巻で総計11,888頁と1万1千頁を超える厚さの‘事典’の中の1頁前後の紙面も割くに値しない‘事項’などとは到底思えないだけに、この点に関する限り『歴史学事典』の‘事項’選択の判断に関してバランス感覚の欠如を見る思いがすると言わざるをえない。

¹¹ なお、ミクロの歴史学的調査研究の成果の詳細については、Muir [1991 : pp.xxii-xxiii] と上村 [1994 : p.117] を参照されたい。

¹² なおギンズブルグを中心としたイタリア学派の研究成果の詳細とその評価全般については、大変刺激的な論考と言っていい上村忠男の「神は細部に宿るか ミクロストリア考」(上村 [1994 : pp.106-155]) を参照のこと。

¹³ (原著を入手できている著作で) 邦訳のあるものについては、訳文を参考にさせてもらったものもあるが、訳文は基本的にばく自身のものである。ただし、イタリア語とフランス語からの翻訳については、この限りではない。

¹⁴ ここで‘ミクロの歴史学の実践者たちを中心にした展望論文情報’と言う場合、大きくは次の2つのサブグループに別れる。一つはミクロの歴史学の実践者たち自身による展望論文情報で、これらに属するのはLevi [2001 (1991) = 1996], ギンズブルグ [2006 (1994) = 2008], Brown [2003] の3つである。もう一つはミクロの歴史学の紹介者たちによるもので、こちらには、〈2.1.〉で取り上げたIggers [1997] の他に、Muir [1991], 上村 [1994], Peltonen [2001], Magnusson [2006 (2003)], Simon [2009] などがある(なお、この分野の関連論文の収集にあたっては、矢延絵美さん[法政大学大学院社会学研究科院生]の協力を得た。記して感謝します)。

¹⁵ 言うまでもなく、先に〈2.2.〉でミクロの歴史学の第5の特徴として指摘した〈記述の中への研究者の視点の組み込みをめぐる問題〉は、生活史研究にとっても重要な問題であるが、この点については、続編で扱うことにしたい。

¹⁶ レヴィに言わせれば、これらの集合的なデータは《取引そのものについての具体的諸事実の検討を不可能にするアプローチであった》(Levi [2001 (1991) : p.101=1996 : p.113])。彼はここであたかも集合的なデータそのものに問題があるかのような書き方をしているのだが、この点については異論を差し挟んでおかななくてはならない。と言うのも、集合的データを用いたこと自体が問題である、というよりも、集合的データの批判的検討とその活用局面を間違えた点にこそ問題があったと考えた方が、問題把握としては適切だからである。つまり、一方で集合的データを成り立たせている元の個別具体的な素材群の性質についての認識を深める(この局面においてこそ、レヴィが主張しているような‘顕微鏡的観察’がその威力を発揮する)と共に、他方では、その検討の結果=成果を組み込むか勘案しながら集合的データを言わば鍛え上げ、そうした二重の作業を通して、集合的データの‘質’保証を行なうという手続きを踏んだ上で、集合的データを用いる局面に移行するならば、そうしたデータを用いたとしても何ら問題はないからであり、それどころか、集合的データを用いた調査研究はその威力を発揮することになるはずだからである。

¹⁷ 別の言い方をすると、場合によっては規模の縮小ではなく規模の拡大という選択肢もありうる、ということでもある(Levi [2001 (1991) : p.111=1996:p.126])。‘規模の縮小’路線の絶対化ではない、という留保が見られることは注意しておいていいだろう。関連諸要因の析出のための、あくまで手段として‘規模縮小’の路線を選択しているのだから。

ここで‘実験的’という形容の仕方の含意にばくなりに踏み込んで考えてみると、ある研究分野で‘実験的’試みと認められるためには、次のハードルをクリアーしている必要があるように思う。それは、提起される着目点や議論、切り込み方が、(今までにない理論的展開可能性を示唆・予感させるという意味で)‘新しさ’‘斬新さ’を備えているのではないかという認識や印象が、問題となっている研究分野でかなりの程度共有される可能性が存在することである。

¹⁸ ここで、‘例外的なもの’‘変則的なもの’をどう位置づけるべきかという非常に重要な論点との関わりで、ギンズブルグ [2006 (1994) = 2008 : p.182] でなされている極端な主張を見ておきたい。彼はそこで《記録資料のなかに姿を見せる異例な要素にたいして歴史家はどのような態度をとるべきか》という問題提起をした上で、この問題に《[い1]「ハバックス」(1例しか確認できない資料)…なるものは、厳

密には存在しない。〔い2〕あらゆる資料は、もっとも異例なものでさえ、系のなかに組み入れることができる。それだけではない。〔ろ〕適切に分析がなされたなら、より広範な資料の系に光を投げかけるのにも使えるのである。》という具合に答えている。彼が‘相当ムキになっている’ことは確実である。この、それ自体としてなかなか微妙で難しい問題について、ギンズブルグがここまで断定的に言い切らなければならないのには、恐らく、「数と無名性」の論理に対する強烈な批判の姿勢が関連しているのであろう。それにしても、ここで彼が行なっている議論、とりわけ〔い1〕と〔い2〕のくだりは、‘いかにも大胆な主張’と言っていいだろう。何しろ、なぜそうしたことが言えるのか、その論拠が示されないまま一方的に主張がなされているにすぎないのだから。論理的に言えば、‘1例しか確認できない資料’というのは、大いにありうるのではないだろうか。また〔ろ〕については、‘…使えるのである’という断定形ではなく、‘使えるという可能性も排除できない’という程度の限定を加える形にしておくべきなのではないかと思う。

¹⁹ この前者の理由をより詳しく展開しているものとしては、例外的事例のいわゆる‘代表性’論がある。それは次のようなものだ。《まさに極限的な事例——メノッキオのばあいもそのひとつであるのは確かだ——は、代表的なものとして示すことができるのである。…ほとんど完全に「抑圧者の文書庫」から出た、断片的で歪曲された記録を通じてしか私たちには知られないなものか（民衆の文化）について、その潜在的な可能性の範囲を明らかにさせてくれるのであるから、積極的に代表たることもあろう》（ギンズブルグ〔1976=1984：p.14〕）。ぼく個人としては、ギンズブルグがここで指摘している事態を指して‘代表性’を主張できるという具合には考えないが、しかし、例外的事例が垣間見させてくれる別の可能性の示唆の議論——つまり、研究対象とする事例が、まさに‘極限的な事例’であるが故に、普通には見て取ることができない‘異質なものの存在可能性’を予感・暗示させてくれるという議論——としてはかなりの説得力を持っているように思う。

²⁰ さしあたりM. S. Archer〔1995：pp.1-2〕を参照されたい。

ここでM・アーチャーの名を挙げている点については、違和感を持つ読者がいるかもしれない。というのも、社会理論の入門書（例えばBest〔2003：pp.181-210〕）で‘構造とエージェンシー’論が紹介される場合には、‘構造化’論の提唱者であるA・ギデنز（Giddens）の議論の紹介から始まり、次いで関連した議論としてP・ブルデュー（Bourdieu）の議論などへと話が進められて、場合によってアーチャーにも触れられるというやり方が通常見られるものだからである。しかしながら、‘構造とエージェンシー’論の本格的な議論展開という観点からすれば、（Archer〔2000〕やArcher〔2007〕などに見られる詳細で緻密な‘エージェンシー’論を含めて）驚くほどの息の長さで理路整然と精緻な議論を展開している彼女の一連の議論こそが注目に値するとぼくは考えている。

²¹ ぼくはここで、この‘拘束性バイアス’の議論がミクロの歴史学一般ではなく、実はイタリア学派に特徴的なものであるという限定づけを行なっているわけだが、それには、ぼくなりの理由がある。それは、ミクロの歴史学の分野に属する有力な研究者と言っているN・デーヴィス（Davis）の場合には、ここで言う‘拘束性バイアス’を持っているのかどうか、が微妙だからである。フランス近世期の農民研究等を専門分野とする彼女は、『マルタン・ゲールの帰還』の「序論」、しかもその冒頭近くで、本人自身がその著作で探求しようとしている研究上の中心的関心に触れているのだが、そこでは‘…しかし、私たちは農民の希望と感情のこと、すなわち、どういうふうに夫婦関係、親子関係を経験したのか、〔イ〕どういう仕方で彼らの人生のなかで束縛と可能性を経験したか、といったことはいぜん、むしろわずかししか知らないのである。》（デーヴィス〔1982=1985：p.15〕）と述べている。（16世紀当時の研究対象地域の移住事情や村での土地相続や売却のしきたり、言語的習慣や宗教的事情などを含めて）当時の農民たちの生活を枠づけていた構造的契機である慣習や典型的な行動様式や（管轄区域内の地区裁判所や、より上級の高等法院などの）裁判制度などの細かい点についての言及などからしても、彼女の著作に規範システムの拘束

的側面への目配りが見られることは確かだが、しかし、先の引用の〔イ〕のくだりに見られるように、彼女自身の問題関心の中心は、あくまで経験主体の側のありよう——つまり、当時の農民たちに見られる《束縛と可能性》の双方の経験がどのようなものであったか、という点——に置かれているのだから。

²² ギンズブルグ〔1974=1986 : p.14〕では‘個々人の自由’と‘規範システムによる拘束性’との関連づけは次のような形でなされている。《…メノッキオ…かれをその時代の（「平均的」とか「統計的に最も頻度が高い」とかいう意味で）「典型的」な農民とみなすことはできない。村のなかでかれがどちらかといえは孤立していたことははっきりしている。…とはいえ、その特異性についてもある限度内でのことにすぎない。意思伝達の不能な狂気のなかに入る以外には、人はその時代やその階級からぬけ出しはしない。言語と同じように文化も個人にたいして潜在的な可能性の限界をなし、そのなかで個人の条件付きの自由が行使されるような柔軟性をもつとともに不可視の檻をあたえるのである。》（p.14）。見られるように、ここでは特異な存在（＝‘村の中で孤立した’位置にいたということ）としてのメノッキオに触れながら、その特異性を枠づける‘文化’の存在——つまり、‘潜在的な可能性の限界’を創り出す存在としての‘文化’の存在——が指摘されているわけだが、ここでとりわけ注目すべきなのは、‘個人の条件付きの自由が行使される柔軟性’を持つと同時に‘不可視の檻’でもあるという形で‘文化’の枠づけ方の両義性が見事に捉えられている点である。

²³ ミクロの歴史学のイタリア学派がなぜそうした特徴的バイアスを持つことになったのか、という点に関しては、1970年代から80年代にかけての当時の欧米の歴史学界の中で彼らが占めることになった位置（Muir〔1991 : p.vii〕）や、階級対立的観点からマクロレベルでの歴史事象を主題的に取りあげていたマルクス主義的傾向の強い研究系譜の問題意識の批判的継承（Iggers〔1997 : pp.107-108〕）の中から彼らの歴史的業績が生み出されていったという時代状況の事情やそうした中での彼らの世界観的前提や世界認識の仕方が大きく関係していることは否定できないように思う。

²⁴ ミクロの歴史学のイタリア学派に特徴的な議論の仕方について、もう一点触れておく。それは**社会的コンテクストの読み取り方**に見て取ることができる。

《したがって、可能性としては、社会的コンテクストを読み取るふたつの方法があるということになる。一つは、〔イ〕隠された意義（hidden significance）を、したがって、システムとの適合性を明らかにすることによって、表面上は「奇妙な」あるいは「異常な」特殊なものに意味を賦与する場として〔社会的コンテクストを読み取るというやり方〕。もう一つは、見かけのうえでは統一された社会的システムの〔ロ〕隠された（全体レベルでの）様々な不整合（hidden incoherences）が明らかにされたとき、外見上は異常な事実、もしくは些細な事実が意味を獲得する社会的コンテクストを発見するという問題として、である。〔先に〕規模の縮小が実験的操作である〔と述べておいた〕が、これはまさしくこの事実のためである。すなわち、規模の縮小〔の議論〕においては、コンテクストとその全体としてのまとまりについての描写は外見的なものであると仮定されているのであり、〔こうして〕参照の規模が変えられたときのみ現れる矛盾が明らかにされることになるのである。》（Levi〔2001（1991） : p.111=1996 : pp.125-126〕）

見られるように、社会的コンテクストの読み取り方には、大きく2つの基本方法、基本方向がある、という形で議論が提起されているわけだが、ここでは、次の4点に触れておこう。

第1は、〔イ〕と〔ロ〕とに共通なのが‘隠された（hidden）’という発想であり、この発想の前提には‘顕在的（manifest）’と‘潜在的（latent）’の二元論が隠れているということ。

第2には、この引用では、‘隠されている’何かの候補として‘意義（significance）’と‘全体レベルでの不整合（incoherence）’とが対比的に提示されているわけだが、この対比の仕方に対する異論である。

研究において探求し説明すべき一番重要なポイントは、そうした対比に、ではなく、研究上の‘意義 (significance)’をどこに見出すかの違いにこそあると考えるからである。つまり、ここでの議論の分岐点は、探求のポイントを‘全体レベルでの整合性 (coherence)’に見出すか、それとも‘全体レベルでの不整合 (incoherence)’に見出すかの違いの指摘と考えておいた方がいいように思う。

第3点は、ここで主題化されているのが、分析や議論に取りかかる際の着目点である‘奇妙なもの’もしくは‘普通ではないもの’の意味づけの仕方についての議論だということである。社会システムと適合的な隠された意義を浮き彫りにする方向で意味づけをやっていくのか、あるいは逆に社会システムの抱え込んでいる構造的矛盾点を浮き彫りにする方向で意味づけを追求するのか、という形で議論を二項対立的に提示した上で、ミクロの歴史学としては、後者の路線で現象を読み解いていくことが提起されている。これは、この歴史学の場合、その研究の焦点が‘複数の規範的システム間の諸矛盾’に定められているのだから、当然のことと言えよう。

最後に第4点としては、引用の末尾にあるように、規模の縮小という実験的試みがこの‘構造的矛盾点浮き彫り’路線を推進していく際の主要なやり方として位置づけられている点も再確認しておきたい。

²⁵ 本文で‘生きられた体験’を客観的な‘不可視の構造’というコンテキストの中に位置づけるという定式化の仕方に触れた。そうした位置づけを行なう場合、‘生きられた体験’との関連で言うと、そこで想定される‘不可視の構造’を設定するやり方には、実は2つのタイプを区別できるという点を指摘しておきたい。

一つは、多様な‘生きられた体験’群に目配りしながら、それらの‘生きられた体験’群の総括的な構図を描き出すという方向で——その意味で、あくまで‘生きられた体験’論の水準で——‘不可視の構造’を析出してくるというやり方である。もう一つは、‘生きられた体験’を超えた水準で‘生きられた体験’を可能にする仕組み・構造的事情として‘不可視の構造’を析出してくるやり方で、通常、‘不可視の構造’という場合には、こちらが想定されていると見ていいだろう。後に〈3.6.〉で‘ミクロからマクロへ’と繋げる議論を紹介・検討するが、そこで用いるミクロとマクロという用語を使えば、前者は‘ミクロ1からミクロ2へ’と繋げていく議論、後者は‘ミクロからマクロへ’と繋げていく議論、と言うことができる。

²⁶ 原文では‘someone’とあるので、そのまま訳すとすると‘誰か’ということになるが、ここでは文意を取って‘研究者’としてある。

²⁷ この論者はさらに踏み込んで、『‘エミック’と‘エティック’との融合不可能性 (the impossibility of welding together “emic” and “etic”)] (Simon [2009 : p.4])』という主張を行なっている。確かに‘エミック’と‘エティック’とはそもそも視点が異なるわけだから、両者の‘融合’というのが相当難しいことは事実である。しかし、両者の‘融合の不可能性’を言いつのっている点については異論を持っている。本文でも触れておいたように、両者の緊張関係自体を視野に入れながら、両者をどこで使い分けどこで関連づけてくるか、という点に留意しながら、多様な形で両者の‘すりあわせ’の試みをやってみることこそが必要なのだから。

²⁸ この関連づけ論に関連させて1980年代のドイツで社会科学的志向を持った歴史家J・コッカ (Kocka) と日常史の歴史学者H・メディック (Medick) との間で激しい論争がなされているようなので (Iggers [1997 : pp.104-105]), この論争点についての詳しい紹介・検討は続編に譲ることにする。そこでは本稿でのぼくの立場の妥当性の再検討に立ち戻ることにもなるはずである。

²⁹ 現時点までのぼくの‘読み込み’作業を踏まえて言えば、ミクロの歴史学における“個性的なもの”への注目の仕方として注目すべき議論としては、次の3つがある。第1が、C・ギンズブルグが彼の有名な方法論的論文である‘手がかり=糸口’論 (1986=1988) の中で詳述している個性化の認識論。第2は、J. Lepore [2001] によるミクロの歴史学と伝記研究との対比の議論。そして第3は、S.G.Magnusson

〔2003〕が歴史学に見られる支配的傾向である‘大文字の歴史物語（meta-narrative）’論を念頭に置きながらその批判として提起している‘独自性（Singularity）’論である。これらの議論の詳細な紹介・検討は、本稿の続編に譲ることにしたい。

³⁰ <ミクロとマクロとの関連づけ>に関する議論としては、次の3種類を区別することができるだろう。つまり、〔い〕<ミクロからマクロへ>と繋げていく議論、〔ろ〕<ミクロとマクロとの往復>の議論、それから〔は〕<マクロからミクロへ>と繋げていく議論の3つ、がそれである。〔は〕は<ミクロへのマクロの組み込み>の議論とみなすこともできる。これらはどれも重要なものなので、本来ならこれら3つとも議論の俎上にのせるべきものである。しかしながら、先に〈3.5.〉でも触れておいたように、ぼく自身の主要な興味関心が、当面は〔d〕<個別事例、もしくは個別事象とそれを超えるものとの関連づけについて、どう考えるべきか>という問題の解明に向けられていること、また、とりわけ、〔ろ〕の<ミクロとマクロとの往復>の議論を主眼的に取り扱うには、ぼくの側の準備が不足しているという事情があるので、本稿では、〔い〕<ミクロからマクロへ>と繋げていく議論のみに限定して話を進めていくことにする。

なお、〔ろ〕の<ミクロとマクロとの往復>の議論については、この問題を提起した（とされる）クラカウアー〔1969=1977〕という著作への言及を含めて、その検討の端緒がギンズブルグ〔2006（1994）=2008：pp.186-192〕に見られ、さらにそのより本格的な検討がギンズブルグ〔2006=2008：pp.139-163〕でなされていること、またギンズブルグやクラカウアーらの議論を受けとめる形でかなり突っ込んだ議論が上村〔1994:pp.141-155〕にもすでに見られることは承知している。すぐ上で‘ぼくの側の準備不足’と述べたが、これは、一つには、〔ろ〕の議論絡みで彼らが提起している主要な論点が何であり、それらの論点に関するぼくなりの方の立場や見解をどう考えるべきなのか、といった点などについて、現時点ではまだ詰め切れていない、という意味であり、もう一つは、（そうした形でこの〔ろ〕の議論を深める上では、最低限クラカウアーの議論と丁寧につきあう必要があるのではないかと考えているのだが、その）クラカウアーの議論と向き合うには、準備のための時間をもっと必要な気がしている、という意味である。

³¹ 本文では、ギンズブルグ〔1986=1988〕に挙げられているものということで、複数事象間の関連づけの2つの視座を紹介したわけだが、関連づけの視座はそうしたものに限定されているわけではない、という点に触れておきたい。

ぼくたちの思考方法についての非常に深い思索の賜物と断言していい議論——とりわけ、ぼくたちが身につけている思考方法そのものがすでにどういった可能性に開かれているのか、という点を概念論のレベルで精緻に展開してくれているという意味で大変魅力的な議論——にG・フォコーニア（Fauconnier）とM・ターナー（Turner）が提唱している‘概念的ブレンディング（conceptual blending）’論がある。そこでは、複数の概念を関連づけていく観点のうち重要なものを総称して‘根幹的諸関係（vital relations）’と呼んでおり、その例として【変化；同一性；時間；空間；原因—結果；部分—全体；描写；役割；類推；非類推；特性；類似；カテゴリー；志向性；独自性】という15の観点が挙げられている（Fauconnier and Turner〔2002：pp.89-102〕）。

³² <原因から結果を導いてくる>という方向性を持った議論としては、<原因らしきもの（原因候補）を特定化した上で、その結果候補を予測する>ということを考えることができるだろう。この場合には、<現在から未来へと予測する>能力が関連してくるわけである。

³³ 医者が直面せざるをえない構造的背景事情として、『医療が抱え込んでいる不確実性』（英訳〔1989〕を踏まえての私訳。ギンズブルグ〔1986=1988：p.195〕では『医学の不確実性』を指摘することができるだろう。Groopman〔2007〕は医師たちの思考傾向や思考パターンをいくつもの感動的なエピソードを交えながら紹介した力作だが、その中には、（いわゆる‘利用可能性ヒューリスティック〔availability

heuristic]’や多様な可能性への目配りをしないままに単一の診断に飛びついてしまう‘係留[anchoring]’などの)‘ヒューリスティック(=診断上の近道)’が随所で登場してくる。これらは、この‘不確実性’を乗り越えようと日常的に格闘している医師たちが直観的に動員してきているものなのである。

³⁴ ある事象について‘構造の析出’が可能になるということは、そこに一種の‘意味的まとまり’が生み出されてくることを意味するはずである。そうした意味で、ここで主張している‘何らかのコンテキストによる関連づけ’の議論は、ぼくが言うところの‘コンテキストづけの能力’——対象認識、対象把握を行なおうとしている主体(ここでは研究主体)の側に言わば‘自然に’備わっていると想定される‘コンテキストづけの能力’——と親和的な関係にある議論とすることができるだろう。この‘コンテキストづけの能力’については、水野〔2000：pp.97-98〕を参照のこと。

³⁵ ここで‘該当箇所では’という限定的書き方をしているのは、同論文の別の箇所(Ginzburg〔1989：p.109〕)で披露されている‘時代推定’論や‘個人名をたどるというやり方’に言及した別の著作(Ginzburg and Poni〔1991：pp.5-7〕)の中では、事実上、この論点に関わる重要な指摘がなされているからである。注41を参照のこと。

³⁶ この〈3.6.2.〉と〈3.6.3.〉のセクションでの議論の仕方について始めに断っておいた方がいいと思うのは、〈3.6.1.〉での議論以上に、以下の議論は、ミクロの歴史学の概要に関する展望論文を検討する中で、ミクロの歴史学に特徴的な研究モードの中に見て取ることができるのではないかとぼくが考えているものだ、ということである。言い換えると、ここでの議論は、ぼく自身の読み込み方がかなり濃厚に‘投影’された形でなされている、という点には注意していただきたい。

³⁷ 極限的事例においては、ここで‘事実の核’を備えた証拠とぼくが読んでいる、その‘事実の核’を経験的に確定することが相当難題を抱え込む可能性にさらされているという点(つまり、ブラウンの主張の‘試金石’である第1のポイントが揺らがされることがありうるということ)については、N・Z・デーヴィスの『マルタン・ゲールの帰還』(1982=1985)というまさに《驚倒すべき物語》(p.147)の顛末の解明に迫ろうとしたミクロの歴史学の分野での古典的著作——今注目している論点について、《この事件はまさしく「最良の」証言が後に誤りと判り、伝聞証拠が後に真実と判り、判事の大半が道に迷ってしまった裁判だった》(pp.150-151)と著者自身によって特徴づけられている大変魅力的な著作——が暗示しているように思う。

なおここで、16世紀フランスのピレネー山脈中のアルティガ村という一農村で実際に起こった事件を扱った本書の大筋を、「日本語版へまえがき」のくだり(p.3)を使って紹介しておけば、マルタン・ゲールという1人の農民が妻子と財産を置き去りにして何年間も消息を断った後、(後にニセモノと判明する)「マルタン・ゲール」なる人物が帰還し、3、4年の結婚生活を再開した後、その人物が実は詐欺師=ニセ亭主であるという告発を受けて裁判に持ち込まれ、にもかかわらず、その人物の弁論での見事なまでの記憶力と圧倒的な説得力の結果、法廷がその男の身元をほとんど信じ込む寸前にまで行っていたまさにその土壇場で本物のマルタン・ゲールが姿を現わす、という大どんでん返しの結末を迎えるということになる。

³⁸ Muir〔1991：p.xix〕は、歴史的出来事の誤った解釈に陥らないように歯止めをかけることができる有力な仕組みとして、次の2つの要件を備えた調査研究の重要性に触れている。一つは、複数の調査結果が独立した形で存在するという点。もう一つは、独立して存在するにもかかわらず、それらの結果が歴史的出来事の解釈可能性を一つの方向へと収斂させていく、ということである。この指摘は、本文でのブラウンの議論を補強するものと位置づけることができるだろう。

³⁹ ブラウンが注目すべき業績として例示的に挙げているのは、Cohen〔1998〕やTaylor〔1995〕を含めて多数にのぼる。より詳しくはBrown〔2003：pp.11-12〕を参照のこと。

⁴⁰ ブラウンが言う意味での‘網羅的探求’という場合の‘網羅性’のイメージをわかってもらうために、

(初期アメリカ合衆国史の分野で研究テーマや対象地域を絞り込んだ形でなされる研究を念頭に置きながら、だと思うが) 彼が関連づけていくデータ類として例示的に挙げているものを紹介してみると、【公的人口記録; 検認済みの遺言記録; 不動産登記事項; 裁判記録; 日記・日誌; 書簡; 新聞; 小冊子; 書籍講読リスト; 地域史; 個々の伝記類】(Brown [2003: pp.18-19]) といった具合になる。

⁴¹ この仮説的アイディアを思いつくきっかけをあたえてくれたのが、実は、Ginzburg [1989] の‘時代推定’に関する議論である。これは絵画の時期推定を行なう際に必要なことは何か、という点について、驚異的な診断能力で知られていたらしいシエーナの医者G・マンチーニ (Mancini) が展開していた議論を紹介する議論脈絡で提示されているものである。《彼が最初に取り上げたのは絵画の年代の問題である。彼の主張するところによると、[い] 年代測定のためには「時代によって絵画の様式がいかに変化するか識別する経験を積む必要がある。それは古物商や図書館員が筆跡を見て古文書の年代を判定するのと同じことである」》(ギンズブルグ [1986=1988: pp.200-201])

ここで注目したいのは、[イ] の指摘である。つまり、ある特定の絵画についてそれがいつの時代に作成されたものかを推定できるようになるためには、同時代やその前後の時代に見られる多様な絵画についての豊富な知識と情報を蓄積しながら、それらの蓄積情報が創り出す認知地図の中で、問題の絵画が占める位置を確定してくるという作業が必要だ、こういう具合に読めるのではないか、ということである。

なお、ここで紹介した背景情報、奥行き作りとしての時代推定の議論と響きあう興味深い議論としては、中井久夫の〈予感と徴候と余韻と索引〉についての議論、(今の議論脈絡で言えば) とりわけ‘余韻’活用・動員の論理の議論がある(中井 [2004a] と中井 [2004b])。そこでは、‘余韻’誘発情報を媒介にして、蓄積・沈殿・シグマ化された‘過去’の‘状況的相貌’が浮上・生成・結晶化してくる、という趣旨の指摘がなされている。

また、ミクロの歴史学の概要について非常にすぐれた見通しを与えてくれているMuir [1991: pp. ix-x] も注目しているように、Ginzburg and Poni [1991] という著作で駆使されている方法の中心的位置にはく個々人の名前をたどっていく (tracing the names of individuals) >というやり方がある、ここでは、対象とする名前を執拗にたどっていくとその線はいくつもの収束と分岐を示すことになり、結果的に個々人が埋め込まれている社会関係のネットワークの網の目が浮かび上がってくると述べられている。これが理想的な結果を生み出した場合には、下からのプロソポグラフィ (= 集団伝記研究) が生成されることになり、そこでは実際の状況の中で現実の人々が直面する関係・決定・拘束・自由が浮かび上がってくることになるだろうと主張されている (Ginzburg and Poni [1991: pp.5-7])。ここにも、事実上、‘証拠の蓄積’と‘多元的コンテクストづけ’との結合と類似した発想を見て取ることができる。そして、これらの論理をより明示的に主題化しているのが、本論で紹介したブラウンの議論だったのである。

⁴² ‘社会的なもの (the social)’ の代わりに、あるいは、それに加えて、‘文化的なもの (the cultural)’ とか ‘時代的なもの (the historical and/or the periodical)’ などを設定することも可能である。ここではそうしたものを入れ込んでくると整理枠組みが複雑になりすぎてしまうので、‘社会的なもの’ だけに限定する形で話を進めることにする。

⁴³ ここで‘個人史’という言い方で念頭に置いているのは、‘個人’を主題的に取りあげることを志向した生活史研究、つまり、すぐ上の整理枠組で言うところの〈・2〉と〈・3〉のことで、ぼく自身がこれまで‘個人生活史’と呼んできたものとはほぼ同じ内容を指している。‘ほぼ同じ内容’なら、もうすでに‘個人生活史’という用語が定着しているのだから、わざわざ‘個人史’を用いる必要はないのではないかと、思われるかもしれない。

しかしながら、ぼくとしては、次のような2つの事情から、この用語を用いることにしたい。

一つは、ぼくの研究関心と関連している。ぼく自身の研究関心は、基本的に、(個人の思考＝発想や感性のスタイル、主要な体験様式、思想的傾向、生き方や人生との向き合い方などを含めた意味での) 個人

のありよう、しかも歴史性・社会性・文化性などを帯びた個人のありように向けられていて、個人研究にますます特化しつつあるべく自身の興味関心を表現する用語としては、そうした意味合いを込めて‘個人史’という言い回しの方がふさわしいと考えるようになって来ている、という事情がある。

さらに言えば、ぼくの中では個人生活史が個人史に含まれるのは当然のことなのだが、それに加えて、ぼくの関心は、これまで以上に多様なスタイルの伝記や自伝研究、自分史研究へと広がってきており、しかも、とりわけ思想的傾向を持った伝記研究や評伝的なジャンルをも含みこんだ方向での研究——本文ですぐ後に触れている用語を用いるなら、‘個人史とそのY’グループや‘Zの伝記’グループ——への関心の方がより強くなってきているのである。

もう一つは、ぼく自身の興味関心の中心の一つである‘個人のありようの歴史性’に焦点化した形の研究方向を表わす上では、‘個人生活史’焦点化よりも‘個人史’焦点化の方がより簡潔な言い回しになっていると思うからである。

⁴⁴ ‘対’となる人物の‘個人史’研究の例としては、ヒトラーとスターリンの《対比列伝（原著の副題はParallel Lives）》と銘打たれた（邦訳で）3巻本の厚さを誇るブロック〔1991=2003〕やフレッチャー〔2010〕などがある。

⁴⁵ ‘個人史の側面X’グループの例としては、フロイト論としては出色と言っている岡田〔2008〕や、清水〔2010〕、同じく熊野〔2009〕などがある。

⁴⁶ ‘個人史とそのY’グループの例として思い浮かぶのは、【ギンズブルグ〔1984〕；トゥールミン&ジャニク〔1992〕；Gay〔2002〕；Haskell〔1998〕；Horowitz〔1994〕；Gross〔2008〕】などである。未見だが、（Muir〔1991：p.xxiii〕）の紹介からすると、Spence〔1978〕やBrown〔1986〕などのマイクロ歴史的業績も、このグループに属するはずである。

⁴⁷ 観点次第では、‘個人史とそのY’グループに入れておいたトゥールミン&ジャニク〔1992〕やGay〔2002〕はこの‘Zの伝記’グループの業績と見なせるかもしれない。また、未見だが、このジャンルに入っているのではないかと勝手に考えているものとして、Camic〔1983〕がある。また、ブルックハルトを中心として複数の‘個人史’を使いながらなされている密度の濃い業績であるGrossman〔2000〕は注目に値する。

⁴⁸ 注25で‘不可視の構造’を設定するやり方として2つのタイプを区別しておいたが、そこでの用語で言えば、＜対象そのものの把握＞は＜マイクロ1からマイクロ2へ＞と繋げていく議論に、＜対象を通しての把握＞は＜マイクロからマクロへ＞と繋げていく議論に、各々対応している。

⁴⁹ 水野〔2005〕におけるアブダクション論の検討箇所（pp57-63）を参照されたい。

⁵⁰ この路線は、ギンズブルグの‘徴候解読型パラダイム’（上村；竹山訳では‘推論的範例’とされているもの）の基本的方法を《諸部分の検討から全体についての知識を積み上げていく》と特徴づけているMuir〔1991：p.xvii〕の把握の仕方と通底している。

＊本稿は2010年度国内研究の成果の一部である。記して感謝します。

《参考文献一覧》

(著者名アルファベット順)

- Appuhn, Karl, 2001, "Microhistory," in Stearns, Peter N. (ed.), *Encyclopedia of European Social History: From 1350 to 2000*, vol.1, Scribner's, pp.105-112.
- 有末賢, 2010, 「ライフストーリー法を学ぶ—テキストの系譜」, 小林多寿子編著, 『ライフストーリー・ガイドブック ひとがひとに会うために』所収, 嵯峨野書院, pp.82-85.
- Archer, Margaret S., 1995, *Realist Social Theory: the Morphogenetic Approach*, Cambridge University Press.
- Archer, Margaret S., 2000, *Being Human: The Problem of Agency*, Cambridge University Press.
- Archer, Margaret S., 2007, *Making our Way through the World: Human Reflexivity and Social Mobility*, Cambridge University Press,
- Berkun, Scott, 2007, *The Myths of Innovation*, O'Reilly.
- Best, Shaun, 2003, *A Beginner's Guide to Social Theory*, Sage Publications.
- Bourdieu et al., 1993=1999, *The Weight of the World: Social Suffering in Contemporary Society*, translated by Ferguson, P. P. et al., Polity Press.
- Brown, Judith, 1986, *Immodest Acts: The Life of a Lesbian Nun in Renaissance Italy*, Oxford University Press.
- Brown, Richard D., 2003, "Microhistory and the Post-Modern Challenge," in *Journal of the Early Republic*, 23(Spring), pp.1-20.
- ブロック, アラン, 1991=2003, 『対比列伝 ヒトラーとスターリン』(全3巻), 草思社。
- Camic, Charles, 1983, *Experience and Enlightenment: Socialization for Cultural Change in Eighteenth-Century Scotland*, The University of Chicago Press.
- Camic, Charles, 2010, "12 How Merton Sociologizes the History of Ideas," in Calhoun, Craig (ed.), *Robert K. Merton: Sociology of Science and Sociology as Science*, Columbia University Press, pp.273-295.
- Chase, Suzan E., 2005, "25 Narrative Inquiry: Multiple Lenses, Approaches, Voices," in Denzin, Norman, K. and Lincoln, Yvonna, S. (eds.), *The Sage Handbook of Qualitative Research* (Third edition), Sage Publications, pp.651-679.
- Cohen, Patricia C., 1998, *The Murder of Helen Jewett: The Life and Death of a Prostitute in Nineteenth-Century New York*, A. A. Knopf.
- コルバン, アラン, 1998=1999, 『記録を残さなかった男の歴史——ある木靴職人の世界 1798-1876——』, 渡辺響子訳, 藤原書店。
- デーヴィス, ナタリー, 1993, 『マルタン・ゲールの帰還—16世紀フランスの偽亭主事件』, 成瀬駒男訳, 平凡社。
- デーヴィス, ナタリー, 1995=2001, 『境界を生きた女たち——ユダヤ商人グリックル, 修道女受肉のマリ, 博物画家メーリアン』, 長谷川まゆ帆他訳, 平凡社。
- Fauconnier, Gilles and Turner, Mark, 2002, *The Way We Think: Conceptual Blending and the Mind's*

Hidden Complexities, Basic Books.

フレッチャー, グレイス, N, 1967=2010, 『メレル・ヴォーリズと一柳満喜子ー愛が架ける橋』, 平松隆
円監訳, 水曜社。

Gay, Peter, 2002, *Schnitzler's Century: The Making of Middle-Class Culture 1815-1914*, Norton.

ギンズブルグ, カルロ, 1976=1984, 『チーズとうじ虫——16世紀の一粉挽屋の世界像——』, 杉山光信訳,
みすず書房。

ギンズブルグ, カルロ, 1986=1988, 「5 徴候——推論的範例の起源」, 竹山博英訳, 『神話・寓意・徴
候』所収, せりか書房, pp.177-226, pp.329-348。; Ginzburg, Carlo, 1989, “Clues: Roots of an
Evidential Paradigm,” in *Clues, Myths, and the Historical Method*, Translated by Tedeschi, John
and Anne C., The Johns Hopkins University Press, pp.96-125, pp.200-214.

ギンズブルグ, カルロ, 1992=1993, 「ミクロストリアとは何か——私の知っている二, 三のこと——」,
竹山博英訳, 『思想』, 岩波書店, 4月号, No.826, pp.4-30。; 2006 (原著1994) =2008, 「ミク
ロストリア——彼女についてわたしの知っている二, 三のこと」, 上村忠男訳, 『糸と痕跡』所収,
みすず書房, pp.164-205, pp.250-262。

ギンズブルグ, カルロ, 1994 (初版1981) =1998, 『ピエロ・デッラ・フランチェスカの謎』, 森尾総夫訳,
みすず書房。

Ginzburg, Carlo and Poni, Carl, 1991, “1. The Name and the Game: Unique Exchange and the
Historiographic Marketplace,” in Muir, Edward and Ruggiero, Guido (eds.), *Microhistory and the
Lost Peoples of Europe*, translated by Branch, Eren, The Johns Hopkins University Press, pp.1-10.

Gray, Marion W., 2001, “Microhistory as Universal History,” in *Central European History*, vol.34, no.3,
pp.419-431.

Groopman, Jerome, 2007, *How Doctors Think*, Houghton Mifflin Company.

Gross, Neil, 2008, *Richard Rorty: The Making of an American Philosophy*, The University of Chicago Press.

Grossman, Lionel, 2000, *Basel in the Age of Burckhardt: A Study in Unseasonable Ideas*, The University of
Chicago Press.

Haskell, Thomas L., 1998, “12. Person as Uncaused Causes: John Stuart Mill, the Spirit of Capitalism and
the “Invention” of Formalism,” in Haskell, Thomas L., *Objectivity Is Not Neutrality: Explanatory
Schemes in History*, The Johns Hopkins University Press, pp.318-367, pp.411-415.

Horowitz, Daniel, 1994, *Vance Packard and American Social Criticism*, The University of North Carolina
Press.

Iggers, Georg G., 1997, “From Macro- to Microhistory: The History of Everyday Life,” in *Historiography in
the Twentieth Century: From Scientific Objectivity to the Postmodern Challenge*, Wesleyan University
Press, pp.101-117. [早島瑛訳, 「日常史, ミクロ・ストリア, 歴史人類学ー歴史社会科学批判ー」,
『20世紀の歴史学』所収, 晃洋書房, 1996年 (原著は1992年)];

小林多寿子編著, 2010, 『ライフストーリー・ガイドブック ひとがひとに会うために』, 嵯峨野書院。

クラカウアー, ジークフリート, 1969=1977, 『歴史 永遠のユダヤ人の鏡像』, 平井正訳, せりか書房。

熊野純彦, 2009, 『和辻哲郎—文人哲学者の軌跡』, 岩波新書。

Lepore, Jill, 2001, “Historians Who Love Too Much: Reflections on Microhistory and Biography,” in *The Journal of American History*, Vol.88, No.1, pp.129-144.

Levi, Giovanni, 1985=1988, *Inheriting Power: The Story of an Exorcist*, translated by Lydia G. Cochrane, The University of Chicago Press.

Levi, Giovanni, 2001(1991), “5. On Microhistory” in Burke, Peter (ed.), *New Perspectives on Historical Writing* (Second Edition), Polity Press, pp.97-119. = ジョヴァンニ・レーヴィ, 1991=1996, 「第5章 ミクロストーリー」, ピーター・バーク編, 『ニュー・ヒストリーの現在—歴史叙述の新しい展望—』, 谷川稔他訳, 人文書院, pp.107-130.

Luria, Keith, 1986, “The Paradoxical Carlo Ginzburg,” in *Radical Historical Review*, 35, pp.80-87.

Magnusson, Sigurdur G., 2006(2003), “67. The Singularization of History: Social History and Microhistory within the Postmodern State of Knowledge” in Burns, Robert, M., 2006, *Historiography: Critical Concepts in Historical Studies* (Vol. IV Culture), Routledge, pp.222-260. = Source: *Journal of Social History* 36 (2003): 701-735.

Merton, Robert, K. and Barber, Elinor, 2004, *The Travels and Adventures of Serendipity: A Study in Sociological Semantics and the Sociology of Science*, Princeton University Press.

Microhistory Network (<http://microhistory.eu/home.html>)

水野節夫, 1986, 「生活史研究とその多様な展開」, 宮島喬編『社会学の歴史的展開』所収, サイエンス社。

水野節夫, 1994, 「個人生活史研究に対する意識変容論・物語論・記憶研究等の貢献可能性の検討」(平成4～5年度科学研究費補助金(一般研究(C))研究成果報告書[課題番号04610116]), pp.1-51. ;

水野節夫, 2000, 『事例分析への挑戦』, 東信堂。

水野節夫, 2005, 「GT法の分析的ポテンシャル」, 『社会志林』, 第52巻, 第3号, pp.47-75。

Muir, Edward, 1991, “Introduction: Observing Trifles,” in Muir, Edward and Ruggiero, Guido (eds.), *Microhistory and the Lost Peoples of Europe*, translated by Branch, Eren, The Johns Hopkins University Press, pp.vii-xxviii.

長井伸仁, 2010, 「プロソポグラフィとミクロの社会史」, 『思想』, 岩波書店, 4月号, No.1032, pp.143-159。

中井久夫, 2004(初出は1990), 「世界における索引と徴候」, 『徴候・記憶・外傷』所収, みすず書房, pp.2-24。

中井久夫, 2004(初出は1990), 「世界における索引と徴候」について, 『徴候・記憶・外傷』所収, みすず書房, pp.25-36。

二宮宏之, 1993, 「思想の言葉——ミクロストリア・マクロストリア——」, 『思想』, 岩波書店, 4月号, No.826, pp.1-3.

岡田温司, 2008, 『フロイトのイタリア—旅・芸術・精神分析』, 平凡社。

Peltonen, Matti, 2001, “Clues, Margins, and Monads: The Micro-Macro Link in Historical Research,” in

- History and Theory* 40 (October 2001), pp.347-359.
- Perecman, Ellen and Curran, Sara R. (eds.), 2006, *A Handbook for Social Science Field Research: Essays & Bibliographic Sources on Research Design and Methods*, Sage Publications.
- Pomata, Gianna, 1991, “Unwed Mothers in the Late Nineteenth and Early Twentieth Centuries: Clinical Histories and Life Histories,” in Muir, Edward and Ruggiero, Guido (eds.), *Microhistory and the Lost Peoples of Europe*, translated by Branch, Eren, The Johns Hopkins University Press, pp.159-204.
- Pomata, Gianna, 1998, “Close-Ups and Long Shots: Combining Particular and General in Writing the Histories of Women and Men,” in Medick, Hans and Charlott, Anne (eds.), *Geschlechtergeschichte und Allgemeine Geschichte: Herausforderungen und Perspektiven*, Wallstein Verlag, pp.101-124.
- Riemann, Gerhard, 2006, “An Introduction to “Doing Biographical Research”,” in *Historical Social Research*, Vol. 31, No. 3, pp.6-28.
- 佐藤・越智・下島編著, 2008, 『自伝的記憶の心理学』, 北大路書房。
- 清水徹, 2010, 『ヴァレリー——知性と感性の相克——』, 岩波新書。
- Simon, Zoltan B., 2009, “Method and Perspective,” in *Journal of Microhistory*, (<http://www.microhistory.org/pivot/entry.php?id=48;pp.1-9>).
- Spence, Jonathan, 1978, *The Death of Woman Wang*, Viking Press.
- Stake, Robert E., 2005, “17. Qualitative Case Studies,” in Denzin, Norman K. and Lincoln, Yvonna, S., (eds.), *The Sage Handbook of Qualitative Research* (Third edition), Sage Publications, pp.443-466.
- Szijarto, Istvan, 2002, “Four Arguments for Microhistory,” in *Rethinking History*, 6/2, pp.209-215.
- 高橋正樹, 2010, 「生活史研究の課題を考える2010・総括」, 『生活史研究会通信』所収, No.74 (9月8日付け), pp.3-6。
- 谷富夫編著, 2002, 『民族関係における結合と分離—社会的メカニズムを解明する』, ミネルヴァ書房。
- Taylor, Alan, 1995, *William Cooper’s Town: Power and Persuasion on the Frontier of the Early American Republic*. A. A. Knopf.
- トゥールミン, S. & ジャニク, A., 1973=1992, 『ウィトゲンシュタインのウィーン』, 藤村竜雄訳, TBSブリタニカ。
- 上村忠男, 1994, 『歴史家と母たち——カルロ・ギンズブルグ論』, 未来社。
- 上村忠男, 2009, 「カルロ・ギンズブルグと民衆文化史の可能性」, 『現代イタリアの思想をよむ』所収, pp.239-274, 平凡社。
- Zuckerman, Harriet, 2010, “11. On Sociological Semantics as an Evolving Research Program,” in Calhoun, Craig (ed.), *Robert K. Merton: Sociology of Science and Sociology as Science*, Columbia University Press, pp.253-272.